

埋蔵文化財調査報告書29

正木町遺跡
(第7次～第9次)

1998

名古屋市教育委員会

例 言

1. 本書は名古屋市中区に所在する正木町遺跡の第7・8・9次発掘調査報告書である。
2. 調査は名古屋市教育委員会が実施した。発掘調査に係わる調整事務は市教育委員会文化財保護室が、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館が担当した。
3. 各次発掘調査の地点、期間、原因、対象面積、担当者は以下の通りである。

第7次発掘調査

調査地点	中区正木二丁目804
調査期間	平成9年4月7日～4月22日
調査原因	倉庫建設
調査面積	約80㎡
担当者	水野裕之・田原和美

第8次発掘調査

調査地点	中区正木二丁目1119-3
調査期間	平成9年9月1日～10月3日
調査原因	個人住宅建設
調査面積	約80㎡
担当者	伊藤正人・伊藤厚史

第9次発掘調査

調査地点	中区正木二丁目12 正木公園内
調査期間	平成9年11月25日～12月19日
調査原因	防火水槽建設
調査面積	約100㎡
担当者	野澤則幸・田原和美

4. 本書では、基準高は東京湾平均海面（T.P.）を、座標系は建設省告示の第VII座標系を使用した。
5. 各次発掘調査および本書の作成にあたり、下記の方々のご教示、ご協力をいただいた。

記して謝意を表する。（順不同・敬称略）

尾野普裕・今井静夫・林 順一・稲垣美生

6. 出土遺物や調査にあたり作成した実測図・写真類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
7. 本書は各次調査担当者の助力を得て、伊藤厚史（第III章）、田原和美（第I・II・IV章および付編）が執筆した。編集は田原が担当した。

目次

第I章 遺跡の位置と概要	
1. 遺跡の位置と環境	3
2. 調査研究史	3
第II章 第7次調査の概要	
1. 調査の経過	7
2. 土層	10
3. 遺構と遺物	10
4. 小結	14
第III章 第8次調査の概要	
1. 調査の経過	15
2. 調査の成果	15
3. 小結	27
第IV章 第9次調査の概要	
1. 調査の経過	31
2. 土層	33
3. 遺構と遺物	34
4. 小結	40
付編 近世以降の正木町遺跡付近の様相	41
参考文献一覧	44

表

第1表 遺跡一覧	4
第2表 正木町遺跡調査年表	6
第3表 伊勢山中学校遺跡調査年表	6
第4表 土層観察表	9
第5表 7次調査検出遺構一覧	11
第6表 7次調査遺物観察表	11
第7表 8次調査ビットマップ表	19
第8表 待避所収容人数	28
第9表 9次調査検出遺構一覧	37
第10表 9次調査遺物観察表	40

図版

第I章	
第1図 遺跡の位置	3
第2図 調査地点位置	3
第3図 周辺の遺跡分布状況	4
第4図 過去の調査地点	5
第II章	
第5図 遺構平面図	8
第6図 基本土層断面図	9
第7図 SK01断面図	10
第8図 SX01出土遺物	12
第9図 包含層上層出土遺物	12
第10図 包含層下層出土遺物	12
第III章	
第11図 遺構平面図	17
第12図 土層図	18
第13図 待避所	20
第14図 刻印拓影	21
第15図 遺物実測図	22
第16図 遺物実測図	25
第17図 待避所の構造と調査事例	29
第IV章	
第18図 遺構平面図	32
第19図 基本土層断面図	33
第20図 SX01遺構状況図	35
第21図 出土遺物	38
付編	
第22図 天保年間(1830~1844)年頃の様子	42
第23図 明治18(1885)年頃の様子	42
第24図 昭和8(1933)年頃の様子	43
第25図 空襲による焼失範囲	43
第26図 戦前・戦後の区画の違い	43

第I章 遺跡の位置と概要

1. 遺跡の位置と環境

正木町遺跡は、現在の名古屋市市中区正木一・二丁目および古渡町の一部にかけて所在する。その範囲は東西約330m、南北約300mにわたると推定されている。遺跡は、名古屋市中心部の洪積台地（通称・名古屋台地）上に位置している。

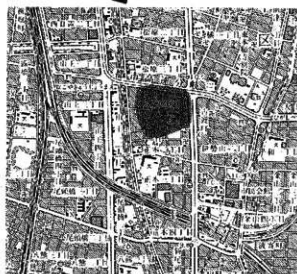
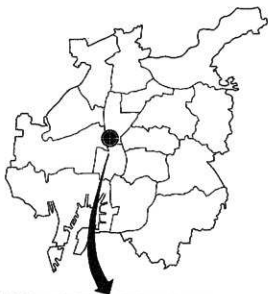
名古屋台地は河川の浸食等によって開析されており、那古野・熱田・御器所・瑞穂・笠寺の小台地に区切られるが、遺跡は南北に展開する那古野～熱田台地の中ほどにある。台地の西縁下には名古屋城築城の際に掘削された堀川が流れ、台地の北・南端にはそれぞれ名古屋城・熱田神宮がある。

この台地上には著名な高蔵遺跡をはじめとして多くの遺跡が確認されている（第3図・第1表）。正木町遺跡も含め、多くは古地の端部に存在しており、時期が降るにつれて古地内部が開発されてきた様子が窺える。周辺の遺跡には時代的にも性格的にも良く似たものが多い。特に、正木町遺跡に南接する伊勢山中学校遺跡は本来的には同一の遺跡と考えられている。さらにその南に展開している尾張元興寺跡や同時期の墓域である東古渡町遺跡などもあわせて、この付近の古墳～奈良・平安時代の集落像を考える上でこれらの遺跡の関係は注目に値する。また、中世にはこの付近で多くの城館が営まれた模様である。その代表的なものが現在の真宗大谷派名古屋別院（東別院）に存在した古渡城跡である。正木町遺跡でもこの時期の溝状遺構が見つかっており、該期の付近の土地利用などを知るには欠かせない遺跡である。

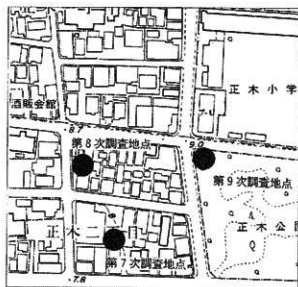
2. 調査研究史

正木町遺跡は、推定範囲の北西部に貝層がみられ、その為かつては正木町貝塚と呼ばれていた。

1951（昭和26）年北村斌夫氏がこの地点で調査



第1図 遺跡の位置（地図＝国土院、1：25000）



第2図 調査地点位置（地図＝都市計画課、1：5000）

を実施したのを嚆矢として、1952（昭和27）年と1995（平成7）年には南山大学によって、1969（昭和44）年には伊藤楨樹氏によってそれぞれ調査が行われている。名古屋市教育委員会による調査は、1982（昭和57）年に実施した試掘調査を始めに、これまで6次にわたって調査が行われている（第4図・第2表）。

遺物は、縄文時代から現代に至るまで幅広く出土しており、内容も豊富である。特に本遺跡では、滑石製模造品や初期須恵器、「黒見田」の文字が刻まれた須恵器、陶馬などの陶製品といった、名古屋域では稀な遺物が出土しており、注目されている。遺構は市教委第5次調査（1995）で検出した弥生中期末後半の方形周溝墓と思われる溝が今までのところ最も古く明確な遺構である。しかし、それ以前の様子は現在までのところ不明である。ただ、伊勢山中学校遺跡ではこの時期の住居址が発見されており¹⁾、墓域として利用されていた可能性は指摘されている²⁾。以降の時期については、古墳時代の住居址11軒、奈良・平安時代の住居址7軒と井戸状遺構、中世の井戸状遺構・掘立柱建物・溝などがこれまでに見つかっている。また第5次調査では、詳しい年代は不明だが、古代の巨大な掘立柱建物が3～4軒確認されている。全体的に遺物・遺構ともに古墳時代～奈良・平安時代に検出例が集中しており、遺跡の中心時期と言えよう。

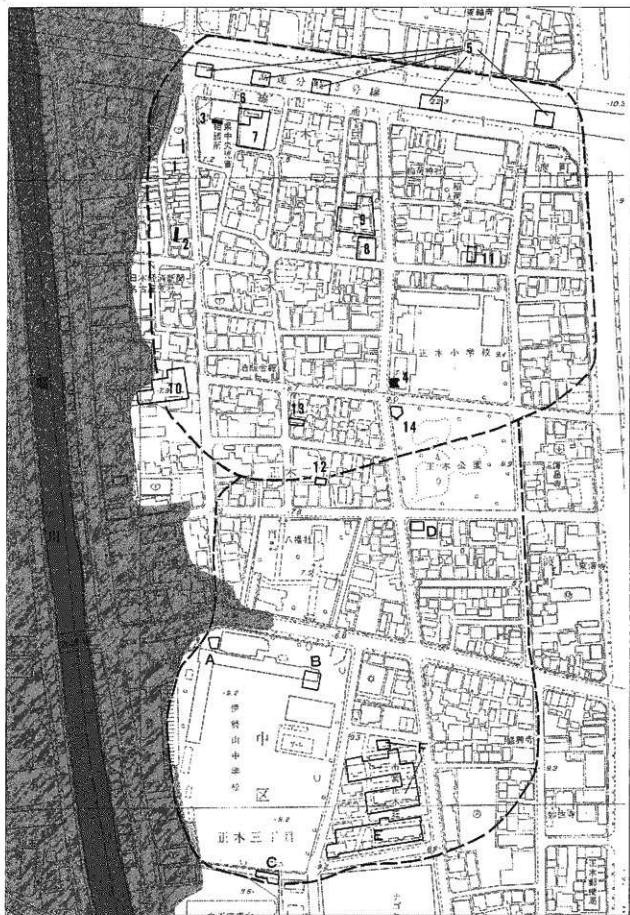
また、南接する伊勢山中学校遺跡では、これまでに6回調査が行われている（第3表）³⁾。なかでも、第5次・第6次調査では古墳時代～奈良・平安時代の住居址や遺物が良好かつ豊富に出土しており、正木町遺跡の成果とあわせ、該期の集落像を探る重要な資料となっている。



第3図 周辺の遺跡分布状況（S=1/20000）

遺跡名	時代
1 竪三蔵通遺跡	旧石器～近世
2 旧柴川遺跡	縄文～近世
3 白川公園遺跡	弥生～近世
4 南大津通遺跡	弥生
5 小林城跡	戦国
6 岩井通貝塚	縄文・弥生・中世
7 西鷺町遺跡	弥生
8 旅籠町遺跡	縄文・古墳・中世
9 松原遺跡	弥生・古墳・中世
10 富士見町遺跡	弥生～近世
11 古渡城跡	弥生・戦国
12 正木町遺跡	弥生～近世
13 伊勢山中学校遺跡	弥生～中世
14 古沢町遺跡	縄文～奈良
15 尾張元興寺跡	奈良～中世
16 東古渡町遺跡	弥生～中世
17 沢観音堂貝塚	?
18 高蔵遺跡	弥生～近世
19 土ノ井遺跡	弥生～中世
20 断夫山古墳	古墳（前方後円墳）
21 森後町遺跡	弥生～中世
22 熱田神宮内遺跡	弥生～中世

第1表 遺跡一覧（番号は左図に対応）



第4図 過去の調査地点 (S=1/3000)

図上(北)：正木町調査、下(南)：伊勢山中学校遺跡
 アミフセは低地部をあらわす

調査年	調査地・調査面積	調査者	主な遺構	主な遺物	現状	文献	図
1951	正木一丁目3	北村 敏夫	貝層、混瓦土層	弥生土器、古墳時代須恵器(初期須恵器含む)、土師器、滑石製銅形模造品など	-	-	1
1952	正木一丁目3	南山大学	貝層	弥生土器、古墳時代須恵器・土師器、滑石製銅形模造品など	個人住宅	朝岡直也 1967	2
1969	正木一丁目4	伊藤 清樹	混瓦土層、古墳時代整穴住居址、カマド状遺構	弥生土器、古墳時代須恵器(初期須恵器含む)、土師器、古代須恵器・土師器、山茶碗	中央児童相談所	伊藤清樹 1969	3
1982	正木一丁目17 約50㎡	市教委 (第1次)	弥生-古代の遺物包含層(保存)	-	市立小プール	市教委 1983	4
1985	山下通 約90㎡	市教委 (第1次)	古代整穴住居址・貝層、中世溝、地蔵による地割れ取跡	古墳時代/古代須恵器・土師器・灰輪陶器・陶瓦、山茶碗、近世陶磁器	名古屋高速築路 部	市教委 1986	5
1987	正木一丁目4 約180㎡	市教委 (第2次)	古墳時代/古代整穴住居址、中世溝、地蔵による地割れ取跡	古墳時代/古代須恵器・土師器・灰輪陶器・陶瓦、陶製紡錘車、山茶碗、中国銭	電力洞道	市教委 1988	6
1988	正木一丁目4 約625㎡	市教委 (第3次)	古墳時代/古代整穴住居址、中世溝、地蔵による地割れ取跡	古墳時代/古代須恵器・土師器・灰輪陶器、山茶碗	変電所	市教委 1989	7
1991	正木一丁目14 約350㎡	市教委 (第4次)	古墳時代整穴住居址、中世溝	古墳時代須恵器(初期須恵器含む)、土師器(移動型カマド含む)、山茶碗	高層マンション	市教委	8
1995	正木一丁目14	南山大学 (市委託)	古代の井戸状遺構、中世溝	古墳時代/古代須恵器(初期須恵器含む)、土師器、山茶碗	高層マンション	-	9
1995	正木二丁目3 約750㎡	市教委 (第5次)	弥生時代(中期後半)方形周溝墓、古墳または古代環立柱地物、古代整穴住居址(カマド状遺構あり)	弥生土器(高森式)、古墳時代/古代須恵器・土師器、山茶碗	高層マンション	市教委 1996	10
1995	正木一丁目16 約140㎡	市教委 (第6次)	古墳時代整穴住居址、中世溝	古墳時代須恵器(初期須恵器含む)、土師器・滑石製白玉、近世陶磁器	個人住宅	市教委 1996	11
1997	正木二丁目8 約60㎡	市教委 (第7次)	弥生時代-中世遺物包含層、時期不明の土坑・ピット	古墳時代/古代須恵器(初期須恵器含む)、土師器・土師、中世陶器	倉庫	本報告 12	
1997	正木二丁目11 約80㎡	市教委 (第8次)	中世溝、防空壕	古墳時代須恵器・土師器、古代須恵器、近世-近代陶磁器	個人住宅	本報告 13	
1997	正木二丁目12 約100㎡	市教委 (第9次)	古墳時代/古代土坑・ピット	縄文土器(中環末)、古墳時代/古代須恵器・土師器	公園	本報告 14	

第2表 正木町遺跡調査年表

(番号は第4図対応)

調査年	調査地・調査面積	調査者	主な遺構	主な遺物	現状	文献	図
1983	正木三丁目2 (伊勢山中学校 地内) 約67㎡	市教委 (第1次)	古墳時代整穴住居址、溝状遺構、掘立柱状瓦	縄文土器片、古墳時代須恵器・土師器、平安時代灰輪陶器、山茶碗、中国陶磁	市立中学校施設	市教委 1984	A
1984	正木三丁目2 (伊勢山中学校 地内) 約110㎡	市教委 (第2次)	古墳時代整穴住居址、中世柱瓦、土坑	縄文土器片、弥生土器片、古墳時代須恵器・土師器、土師、陶鉢、朝鮮半島、碧玉	市立中学校校舎	市教委 1985	B
1987	正木三丁目2 約165㎡	市教委 (第3次)	古墳時代および平安時代整穴住居址、柱瓦、土坑	弥生土器片、古墳時代須恵器・土師器・灰片、平安時代須恵器・土師器・灰輪陶器、土師・陶鉢・石皿、製塩土器	宗教団体施設	市教委 1987	C
1987	正木二丁目13 約360㎡	市教委 (第4次)	中世溝・井戸状遺構、近世溝	中世陶器・丸・土師、石塔片、近世陶器	高層マンション	市教委 1989	D
1993	正木三丁目4 約1500㎡	市教委 (第5次)	弥生時代(中期後半)矩形住居址、古墳時代整穴住居址、溝、掘立柱地物	弥生土器(高森式)、古墳時代須恵器・土師器・勾玉・鉄器、中国陶器	市営住宅	市教委 1996	E
1996	正木三丁目4 約1300㎡	市教委 (第6次)	古墳時代/奈良-平安時代整穴住居址、中世溝・土坑・井戸	古墳時代/奈良-平安時代須恵器・土師器、中世陶器・陶製瓦・馬骨など	市営住宅	市教委 1997	F

第3表 伊勢山中学校遺跡調査年表

(番号は第4図対応)

注1) 伊勢山中学校遺跡第5次調査S日26の扉面直上から高麗式期の鏝・瓦・甍外土などが出土している。

注2) 市教委 1986 「正木町遺跡-第5次調査の概要-」参照。

注3) また記載はしていないが、1997(平成9)年に第7次調査が実施された。

第II章 第7次調査の概要

1. 調査の経過

今回の調査は、有限会社三幸電化工業所の倉庫建設に伴うものである。調査地点を含む敷地は以前市の保留地であった関係で1987（昭和61）年に試掘調査が行われている。その際かなり良好な包含層が確認されていた為、文化財課（現・文化財保護室）の調整により発掘調査を実施することとなり、倉庫が建設される敷地内南側約80mを対象とした。調査地点は遺跡推定範囲の最南端に位置し、伊勢山中学校遺跡との境に当たる。過去6次におたる調査は特に遺跡範囲の北・西側に集中しており、南側を発掘するのは初めてである。調査区は変形の台形で、排土を積み置くために、東西で2分し発掘にあたった。

〈日記抄〉

- 4月3日 事業者・文化財保護室・調査担当の各代表による現地打ち合せ。
- 7日 準備工（事務所・フェンスの設置、器材搬入）。雨天の為測量などは延期。
- 8日 西半区表土除去工開始。基準点・水準点測量実施。
- 9日 表土除去および包含層掘削。層位やその厚さは試掘調査の報告のとおりと確認。
- 10日 包含層掘削。併行して遺構検出を行おうとしたが、地山上面は鉄分が沈着しており困難。
- 11日 遺構検出および掘削、平板測量、西半区写真撮影。地山上面を除去。遺構数は極めて少ない。
- 14日 西半区レベリングの後、東半区表土除去開始。
- 15日 包含層掘削。部分的に遺構検出作業へ。
- 16日 遺構検出。その後園化作業および平板測量・レベリング、東半区写真撮影。遺構はなし。
- 17日 後片付工（事務所・フェンスの撤去、器材撤出）。埋戻し不要とのこと、積み置きた土砂が崩れないよう処置。発掘作業終了。

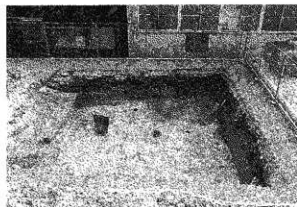


写真1 西半区全景（北から）



写真2 東半区全景（西から）



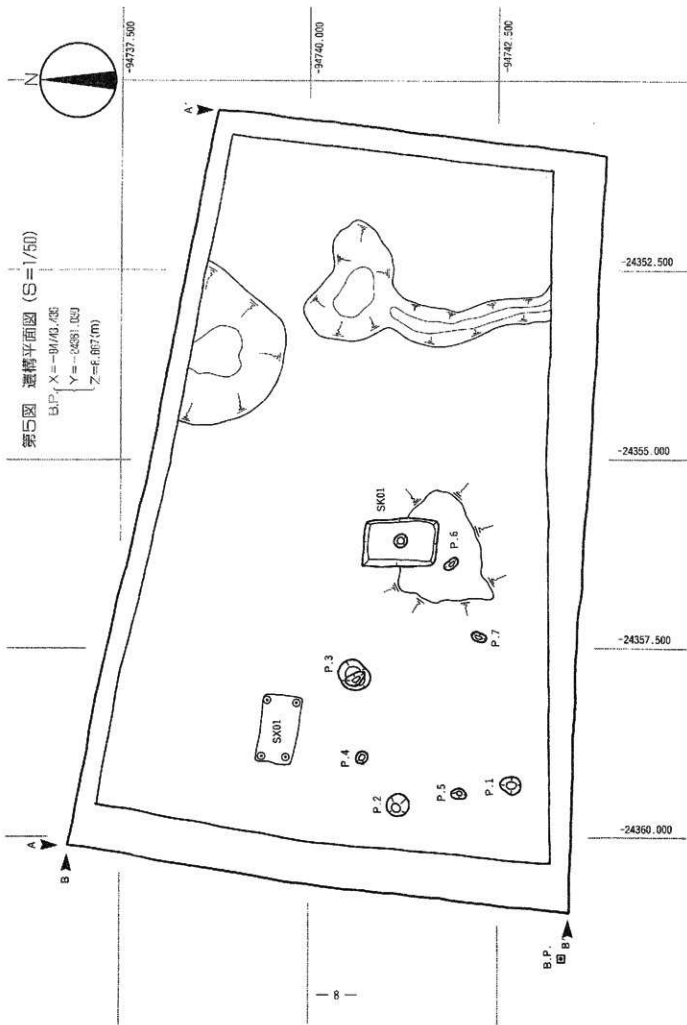
写真3 調査風景



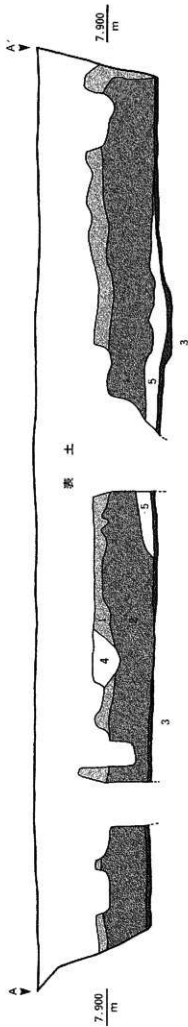
写真4 調査風景

第5図 遺構平面図 (S=1/50)

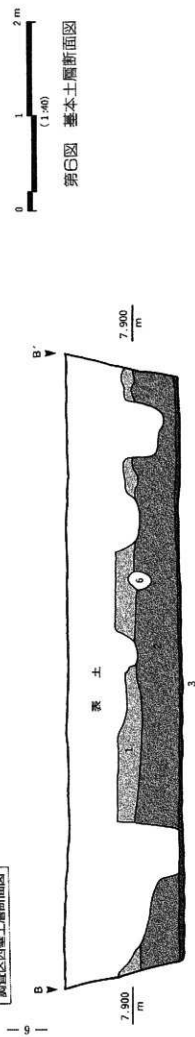
B.P. X=-94740.726
Y=-24351.069
Z=6.677(m)



調査区北壁土層断面図



調査区西壁土層断面図



第6図 基本土層断面図

番号	土層	私注	しほり	注 記	遺物の時期
1 (底壁)	灰褐色砂質土	なし	弱い	均質で混入物はない。新倉層上層。	近世以前
2 (壁脚)	暗褐色土+暗褐色地山ブロック	あり	強い	地山ブロックが上位から下位まで均質に混じる。遺物包含層。	中世以前
3 (壁脚)	暗褐色砂質シルト	なし	強い	地山上面に鉄釘が混入したもの。調査区全体に広がる。	近世以降
4	灰褐色土	なし	なし	1に混るが全体にスが入る。	近世以前
5	暗褐色地山ブロック+褐色土	あり	強い	2に混入している地山ブロックが主体。	古世以前
6	黒灰褐色土	なし	弱い	砂っぽく、鉄釘が混入している。	

第4表 土層観察表

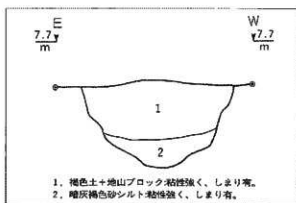
2. 土層

基本層位は、表土から灰褐色砂質土層(1)、暗褐色土+明褐色地山ブロック層(2)、赤褐色シルト層(3)と重なり、黄灰褐色の基盤層(地山)へと続く。全体にかなり厚く堆積しており、地表面から地山面まで約115cmを測った(第6図)。

(1)は近世の包含層、(2)は中世以前の遺物を含む包含層である。後者は「良好な包含層が残存する」と試掘調査で報告されている。約50cm前後という厚い堆積状況にもかかわらず、非常に均質で、混入している地山ブロックや遺物が集中している箇所は見られなかった。(3)は地山直上で調査区全体に広がり、鉄分を多く含み、非常に硬い。また、地山そのものにかなり凹凸がみられ⁴⁾、この様な部分や下り気味の東側には、(2)と(3)の間に明褐色地山ブロックが主体となっている褐色土層(5)が確認されている。

3. 遺構と遺物

今回検出できた遺構は、土坑(SK)1基・小穴(Pit)7基・近代遺構(SX)2基にすぎない(第5表)。SXは包含層中にて、SK・Pitは地山面で検出した。遺構は調査区の西南部分に集中しており、東側は地山自体に凹凸が目立った。SX以外で遺物を伴ったのはPit6のみである。だが、それも土師質の小破片が1片出土しているのみである。SK・Pitはいずれも地山面からの掘りこみは深かった。



第7図 SK01断面図 (S=1/15)

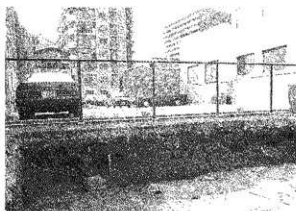


写真5 調査区西壁

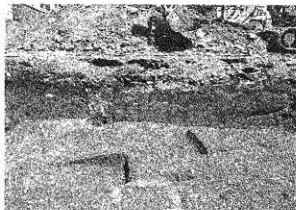


写真6 調査区北壁(西半区部分)



写真7 SK01(北から)



写真8 SK01(東から)

遺物はコンテナケースにして1箱強出土した。遺構に伴うものはごくわずかで、包含層中から出土した破片資料が大半を占める(第6表)。そのため今回の遺物については、一括性を望めない。

近世の包含層である灰褐色砂質土層からは、丸碗(第9図)が出土している他に、陶器の小破片が数点検出できた程度である。

その下層である暗褐色土+地山ブロック層からは弥生後期から中世までの遺物が出土している(第10図)。破片資料のみで完形資料は見当たらない。器種・器形が判断できるものもごく僅かである。この土層はかなり厚く堆積しているが、層内の上下に遺物の時間差は関係していない。ある地点で集中して出土する状況も認められない。出土した遺物は約370破片を数えるが、これらを所属すると思われる時期別に分けてみると、弥生時代:約13%、古墳時代:約41%、奈良・平安時代:約18%、中世:約10%となった¹⁹。

弥生時代の遺物は第10図1~3以外には高杯の脚部と思われる破片が2・3点見受けられたが、多くは胴部破片である。中には赤彩の痕跡が認められる小破片もあった。古墳時代の遺物は数量的に目立つが、なかでも目をひくのが須恵器(第10

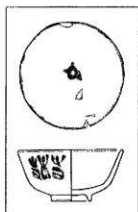
図4・8~16/以下数字は図中番号を指す)である。器種・器形が判断できる例も他の時期に比べて多い。全体的に焼成は良好だが、やや軟質なものもみられる(4・11・12)。4は縦方向のタキが施されており、胴部下方はヘラで軽く削られているようである。鉢としたが類例が見当たらない。同様に縦方向のタキ目を持つ破片には12がある。11は初期須恵器に良くみられる観のタキ目を持つ。13~16は今回出土した中でも特に器壁が薄く、硬く焼き締められている。奈良・平安時代の遺物は灰種陶器(5・6)や須恵器(7)の破片が多いが、器形がわかる資料は少ない。中世の遺物は山茶碗と思われる胴部破片が多いが、少数ながら古瀬戸・常滑などの陶器片が出土している。17は古瀬戸の破片で全体に灰種が掛かっているが、内面に緑色の釉溜まりがある。皿類などの器高が低めの器種と思われる。18は鉄軸で、古瀬戸後期様式のものと考えられる。この他、時期が特定できない瓦などの破片も数点出土している。8の土鏝も具体的な所属時期が判断できない。土師質で両端が欠損しており、側面の一部が摩耗して直線的になっている。表面はナデが施されているが、部分的に指爪痕が残っている。正木町遺跡での土鏝の報告例は第4次調査での1点のみだが、伊勢山中学校遺跡では古墳時代から中世にかけて数十点出土している²⁰。

遺構名	埋土	出土遺物	備考
S K 01	褐色土+地山ブロック	—	方形。中心に小穴。
Pt 1	暗褐色土+地山ブロック	—	
2	灰暗褐色砂質土+地山ブロック	—	
3	褐色土+地山ブロック	—	鉄分が表面に沈着。
4	暗褐色土+地山ブロック	—	
5	褐色砂質土	—	
6	暗褐色土+地山ブロック	土師質の小片	
7	暗褐色土+地山ブロック	—	
S X 01	黒灰色砂質土	須恵器茶碗	包含層中検出。
S X 02	黒灰色砂質土	瓦片、焼瓦片?	包含層中検出。

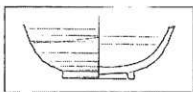
第5表 7次調査検出遺構一覧

図中番号	出土位置	器種	器形	土層	年代	備考
1	S K 01	須恵器	丸碗	5.5	4.0	2.26 近代以降
2	遺構P1	須恵器	丸碗	—	—	5.3 須恵器、針山台
3	1-1 遺構下層	弥生土器	高杯(脚部)	2.2	—	—
4	2	弥生土器	高杯(脚部)	—	—	内面に1道+縦線
5	3	弥生土器	高杯(脚部)	—	—	外縁へらしぎ
6	4	須恵器	鉢?	10.0	—	鉢の縁部(10.0)と須恵器(10.0)のタキ目
7	5	須恵器	高杯(脚部)	—	6.0	須恵器(7.0)のタキ目、タキ目
8	6	須恵器	高杯(脚部)	—	6.0	須恵器(7.0)のタキ目、タキ目
9	7	須恵器	高杯(脚部)	—	—	須恵器(7.0)のタキ目、タキ目
10	8	土師質	土鏝	—	—	須恵器(7.0)のタキ目、タキ目
11	9	須恵器	高杯(脚部)	—	—	—
12	10	須恵器	高杯(脚部)	—	—	須恵器(7.0)のタキ目
13	11	須恵器	高杯(脚部)	—	—	須恵器(7.0)のタキ目、タキ目
14	12	須恵器	高杯(脚部)	—	—	須恵器(7.0)のタキ目、タキ目
15	13	須恵器	高杯(脚部)	—	—	—
16	14	須恵器	高杯(脚部)	—	—	—
17	15	古瀬戸	皿	—	—	須恵器(7.0)のタキ目、タキ目
18	16	古瀬戸	鉄軸	—	—	須恵器(7.0)のタキ目、タキ目

第6表 7次調査遺物記録表(第3~10図対応)



第8図 SX01出土遺物



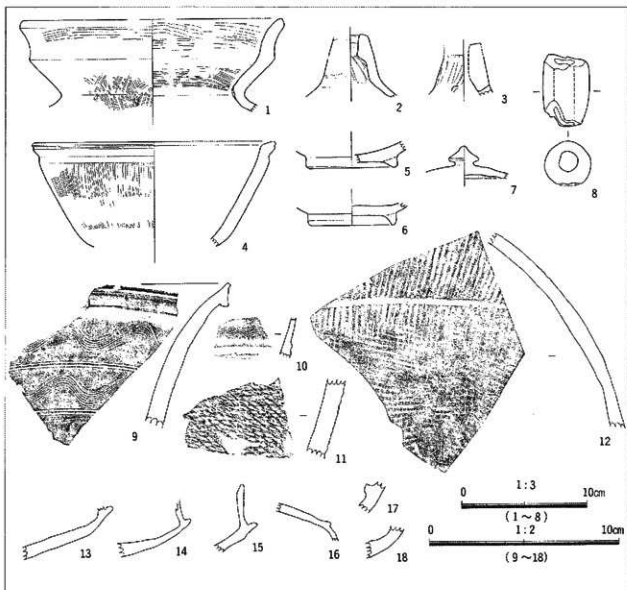
第9図 包含層上層出土遺物



写真9 SX01出土遺物



写真10 包含層上層出土遺物



第10図 包含層下層出土遺物

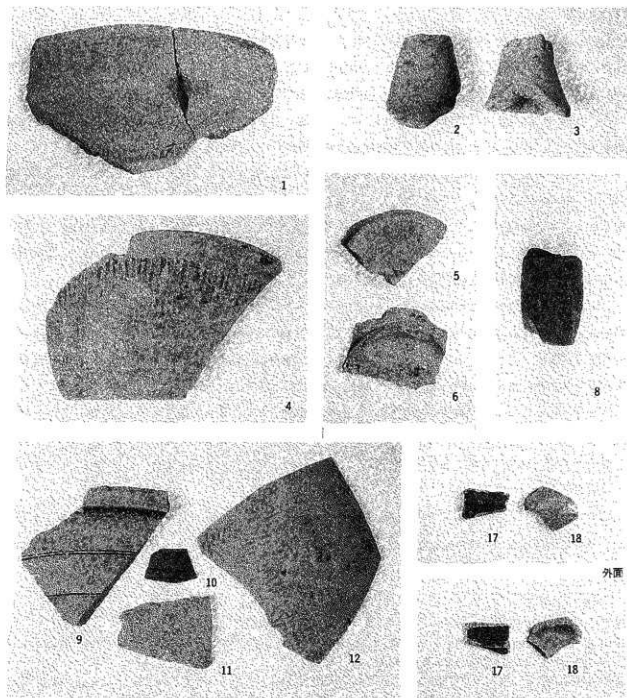


写真11 包舍層下層出土遺物 (番号は第10図対比)

内面

4. 小結

今回の調査では遺構・遺物があまり検出されず、正木町遺跡の過去の調査例とは異なる様相を見せた。特に、非常に厚く堆積した均質な弥生後期～中世の包含層（以下、包含層）は、これまで正木町遺跡において確認されておらず、第7次調査の最も特徴的な成果といえる。

この包含層は厚く堆積しているが、地山ブロックの混入の度合いが均一であり、自然堆積の痕跡は確認できなかった。そして、含まれていた遺物は層全体に時期差なく散在していた。また、本来地山ブロックと同一の土が形成していただろう熱田層上部^{註4}が、東側の地山がへこんだ部分を埋めるかのように少量残存していたのみであった。この様な状況から、調査地点では中世に熱田層下部の砂層上面のレベルまで削平され、その後短期間で上を盛られたと考えられる。この際、掘り出された熱田層上部とそれまでに堆積していた暗褐色土が使用された結果、均質な土層を形成したのではないと思われる。検出した遺構数が少ないのは、硬い砂層の上面を突き抜けて深く掘削された遺構しか残らなかったからだろう。

しかし、この状況が何を物語るのかについては不明である。調査面積がごく狭く、限られているため、調査地点を含めたある程度の広い範囲に対して同様の現象がみられるのか、あるいは部分的なもののかも判断できない。よって、この土層は中世に行われた土地整備を示すものかもしれないし、たまたま第5次調査で検出されたような巨大な溝状の落ち込み^{註5}の一部分を調査したにすぎないのかもしれないといった可能性を挙げることも現時点ではできない。ただ面白いことに、過去この近辺でおこなわれた正木町遺跡第3・4・6次調査および伊勢山中学校遺跡第4次調査で検出された中世溝の埋土は、今回の調査の包含層によく似たものだったようである。このことは、この土層の性格を考えるうえで大きな参考になるだろうと思われる。

いずれにせよ、このあたりが中世に城跡など何らかのかたちで土地利用されていたことはあきらかであり、今回の調査はこの点について新たな材料を提供する結果となった。今後の調査次第の積み重ねと共に、第7次調査の成果はより正確に捉えられ、活かされることになるだろう。

註1) 人為的な掘削の結果と判断できる形跡がないため、自然地形と考えている。

註2) おおよそ識別できた破片を基にした数値である。小破片が多いため不確かな部分もあり、誤差の可能性も高い。この数値は大方の傾向を表すものと考えていただきたい。

註3) 第4次調査で古墳時代の住居址（SB01）から須恵器などと共に土甕が1点出土している。一方伊勢山中学校遺跡では1～5次調査で67点の土甕が古墳時代～中世の遺構および包含層から検出されていると報告されている。時期が明確にできない個体も多いが、古墳時代に集中するようである。

註4) この辺りでは普遍的にみられる明褐色の粘土層。基盤層とする熱田層の最上面に位置する。その下はやや粒子の粗い砂層で、ここでは熱田層下部としておく。

註5) 第5次調査SD2。ただし、SD2は調査担当者によれば古代に限定されるという。SD2の断面からは、古墳時代～古代に比定される大規模な掘立柱遺物群が見つかった。

第三章 第8次調査の概要

1. 調査の経過

当調査は個人住宅建築にともない実施した事前調査である。調査地点は、南森八幡社の北約75m、台地西縁端から約125m東に位置する。また第7次発掘調査地点は、直線距離にして約38m南東の地点である。調査対象面積は約80㎡、調査期間は平成9年9月1日から10月3日である。

調査地は、西側が公道に面し、東西方向に長い土地で、三方は隣接住宅の塀に囲まれている。掘削によって生じる排土は、積み置きしておくため南北半々に区分して、北側を前半区(N区)、南側を後半区(S区)として調査を進めた。

9月1日、前半区の表土除去を重機を用いて行い、続いて包含層掘削、遺構検出及び掘削を行った。当地は北壁に沿って土管設置溝、中央に太平洋戦争中に構築された待避所(防空壕)があったほかは、近世以降の掘り込みは少なく包含層等の堆積は、良好な状態であった。ただし遺物はあまり含んでいなかった。中世以前の遺構は、調査区の中央を東西方向に溝状遺構を1条検出した。5日全景写真撮影、9日、10日トータルステーションによる平面図作成及び土層断面図を作成した。後半区は、9月12日表土除去を行い、翌週から包含層掘削、遺構検出及び掘削を行った。遺構は前半区で検出したのと同様な溝状遺構を検出した。24日全景写真撮影を行った。その直後の台風の影響による降雨により数日間作業が中断したが、前半区同様平面図、断面図を作成し、終了後埋め戻しを行い、器材等搬出して現地調査を終了した。

2. 調査の成果

(1) 基本土層 (第12図・写真13)

当調査地点は台地上であることや、調査範囲が狭いこともあり水平堆積であるので、基本的土層について調査区西壁面の観察により述べる。土層は基本的に4層に分層される。第1層は、現地表から約20cmまでの表土層で、部分的に焼土層がある。この焼土層は、太平洋戦争の空襲時のものである。第2層はその下約12cmの厚さの灰褐色砂質土、第3層はその下約10cmの厚さの黒褐色粘質土、第4層は基盤層である橙黄色シルトである。この基盤層は熟田層と呼ばれている。ただし、橙黄色シルトの基盤層が残っていたのは、調査区西端部のわずかな部分だけであり、大半はこの橙黄色シルト下位層にあたる黄灰色砂質土まで約30cm削平された状況であった。標高は、現地表面が約8.44m、橙黄色シルト面が約8.02m、黄灰



写真12 調査風景

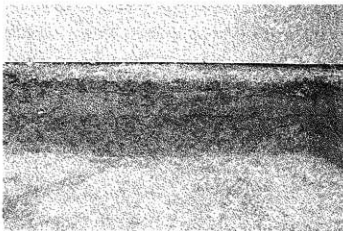


写真13 土層 (S区東壁)

色砂質上面が約7.70mを測る。

(2) 検出遺構

検出した遺構は溝状遺構2条、ピット41基、退避所1基で、検出順に番号を付した。溝状遺構は、削平されてフラットになった基盤面に人為的に黄褐色土や黒褐色土で土盛りをして溝の肩を形成したもので、2条平行して造られていた。ピットは、この溝の肩で検出されたものは、掘り上げても明瞭な形とならなかったことから、盛土中の黒色土塊そのものである可能性が高い。基盤面で検出したのはわずかで、削平を受けているため残存状況は悪い。

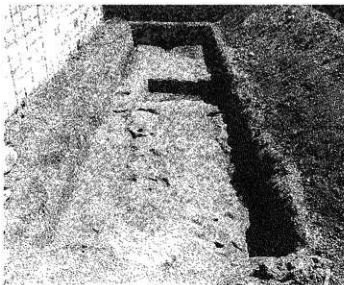


写真14 調査区全景 (N区 西から)

SD01(第11図・写真14・15)

調査区の北寄りで検出された溝状遺構である。本遺構は、平坦な基盤層上に黄褐色土や橙黄色土、黒褐色土で人為的に東西方向に土を盛った部分が2条あり、その間が相対的に窪まり溝状を呈する遺構である。溝の幅は約1.0~2.0m、深さは約15~40cmである。埋土は、黒色ブロック土と褐色ブロック土が混在し、黒褐色を呈している。この黒褐色土は、盛土上位にもあり、また上位層の黒褐色土包含

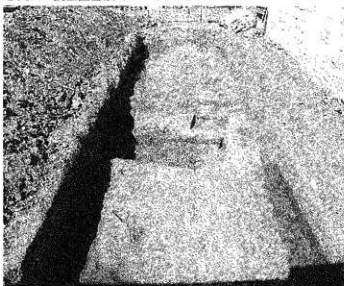


写真15 調査区全景 (N区 東から)

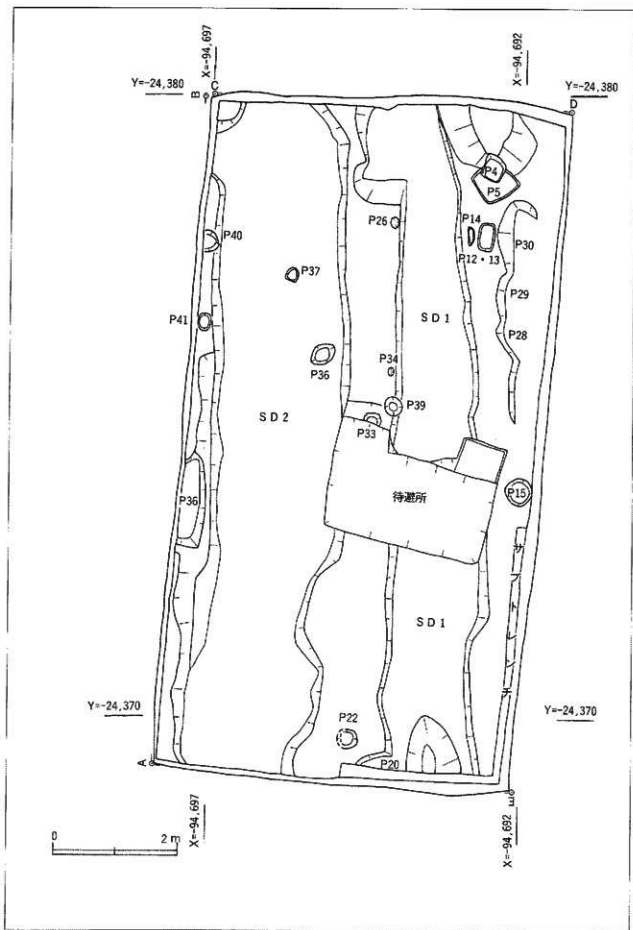
層と遺構埋土と明確には区分できなかったことから、溝の規模や深さは本来もう少し大きかったものであろう。溝は西端部で南に80cm程拡張しているが、調査区外まで幅が広いまま続くのかは不明である。

SD02(第11図・写真16・17)

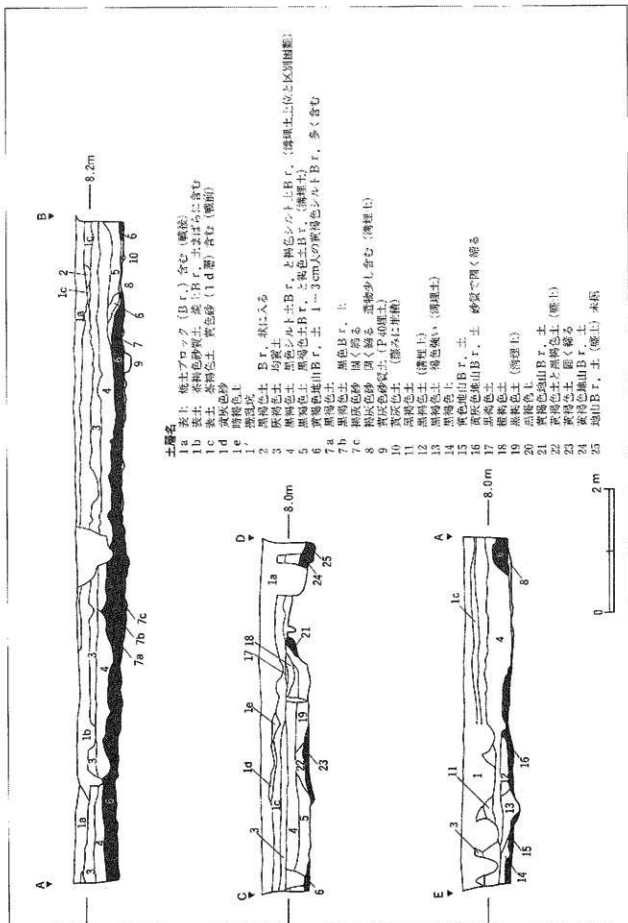
調査区の南寄りで検出された溝状遺構である。本遺構は、SD01同様平坦な基盤層上に黄褐色土や橙黄色土、黒褐色土で人為的に東西方向に土を盛った部分が2条あり、その間が相対的に窪まり溝状を呈する遺構である。溝の幅は約2.0m、深さは30~36cm程である。埋土はやはり黒色ブロック土と褐色ブロック土が混在し、黒褐色を呈している。SD01同様に調査区西端付近で幅が広がる。

待避所(第13図・写真18~21)

調査区中央で検出された。本遺構は、表土層から掘り込まれている。形状は、南北約2.6m、東西約1.4mの長方形を呈し、南西隅が西に折れ出入口となっている。深さは、現地表面から底面(基盤層)まで約1.4



第11図 遺構平面図 (S=1/60)



第12図 土層図 (S=1/60) アミノセは腐土部分

mを測る。底面には、南北中軸線上に幅約20cm、深さ約7cmの溝が掘られていた。本遺構は、壁面や床面に使用した木材が遺存しており、当時の待遊所の状況をよく残していた。また、火災を受けたようで、木材の一部は炭化していた。底面には板材が敷かれていた。床は、幅20cm、長さ約2.5mの板材を6枚使用していた。壁面には、幅18cmの板材を使用していた。3枚分が遺存していたが炭化していた。壁材を押さえるように壕の長辺には8cm角の柱材を4本ずつ計8本立てていた。床板材を取り除いたところ、壕の長軸に直交して柱材との間に6×7cm角の横木を置いていた。その横木がずれないように脇に木製楔を蒸籠に打ち込んでいた。

床板上には北東隅に焼けた布の塊や炭化した席の一部が残っていた。埋土は、下位層は黄灰色砂、上位層は焼土とともに焼けた瓦で充填されていた。

ピット (第7表)

41基のピットを検出したが、掘削の結果、溝を形成する盛土の黒色土塊をピットと命名した可能性が高いものがある。

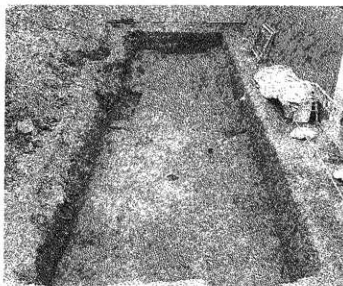


写真16 調査区全景 (S区 西から)

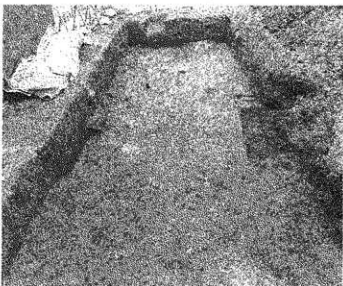
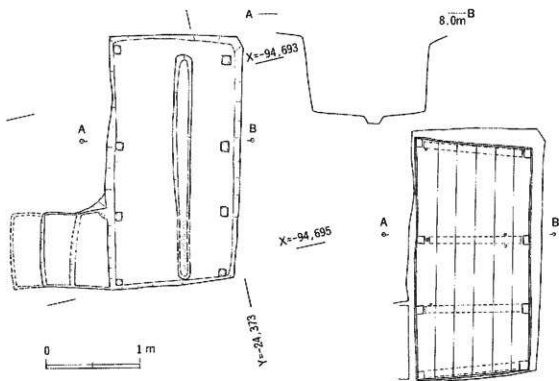


写真17 調査区全景 (S区 東から)

遺構名	検出層位	規模(cm) ()は深さ	備考	P 29	地山Br.土	[30]×[70](5)	窪みか盛土
P 4	P 5埋土	34×38(9)	擾乱か	P 30	地山Br.土	[60]×[110](8)	窪みか盛土
P 5	黒色土	58×62(2)		P 33	地山	[12]×[20](6)	瓦、石
P 12	地山Br.土	20×26(7)	P 13・14より新	P 34	地山Br.土	9×12(7)	
P 13・14	地山Br.土	20×26(7)10×28(6)		P 36	盛土	[40]×140(4)	窪みか盛土
P 15	表土	42×42(8)	糞を埋設	P 37	溝底地山	18×20(9)	
P 20	地山Br.土	[26]×[56](8)		P 38	溝底地山	30×34(6)	
P 22	地山Br.土	[20]×30(9)		P 39	盛土下地山	26×30(5)	
P 26	地山Br.土	14×16(7)		P 40	盛土下地山	34×[20](9)	
P 28	地山Br.土	[40]×[70](5)	窪みか	P 41	盛土下地山	20×28(9)	

第7表 日次調査ピット一覧表



第13図 待遊所 (左図/掘り方、右図/床材の復原 アミフセは推定 S=1/40)

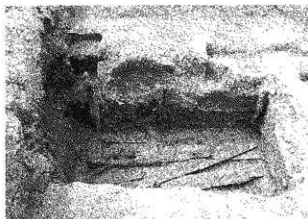


写真16 完掘状況 (N区 東から)

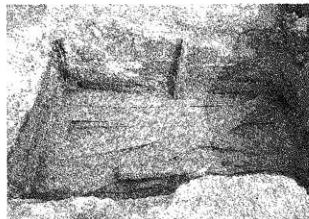


写真19 完掘状況 (N区 西から)

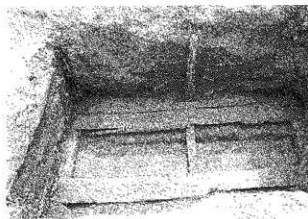


写真20 動いた床板材を取り除いた状況 (西から)

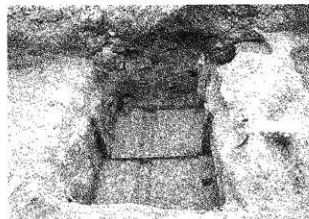


写真21 床板材を取り除いた状況 (北から)

(3) 出土遺物

遺物は、コンテナケース(34×54×14cm)に約3箱分である。内2箱分は古墳時代から中世までの土師器、須恵器、山茶碗等で小破片資料である。残りの1箱分は、待避所出土の瓦、布、木材片等である。

表土・包含層(第15図1~12・写真22~34)

土師器は、器形の判読できない小片が大半である。1は、高坏脚部で、脚径10.0cmを測り、橙色を呈する。N区出土。2は須恵器の頸口縁部で、内外面は褐色であるが、断面は赤褐色である。N区出土。3は土師器の甌または鉢の把手部分で、灰白色を呈する。焼成は良好であるが軟質であるため軟質土器かもしれない。N区出土。4は須恵器で、外面に縄目印き痕が残る。内面はナデ調整を施す。淡灰色を呈する。S区出土。5は滑石裂白玉で、直径4.5mmを測る。灰白色を呈する。片面は欠ける。S区出土。6は窯道具(トテンの一種)である。平坦面に焼物の痕跡がある。直径約6.4×6.1cm、厚さ約1.1cmを測る。S区出土。7は陶器蓋で口径9.2cm、器高3.8cmを測る。上面に灰釉が施される。露胎は灰白色を呈する。内面ヘラケズリ調整、かえり部はヨコナデ調整を施す。N区出土。8は陶器筒茶碗で、口径7.0cm、器高5.3cm、高台径5.0cmを測る。内外面に灰釉が施される。18世紀後半~19世紀初頭、瀬戸産。N区出土。9は陶器植木鉢で、口径8.0cm、器高7.3cmを測る。体部下端に脚が3つ貼り付けられる。底部から口縁部にかけてつや消しの漆黒調の釉が施される。N区出土。10は肥前系磁器碗で、口径6.6cm、器高5.2cm、高台径3.0cmを測る。体部外面に灰須で渦巻き模様を描かれる。N区出土。11は陶器植木鉢で高台径18.8cmを測る。N区出土。高台内面に陰刻「玉□」がある(第14図1)。12はガラス製牛乳瓶で口径3.0cm、器高12.1cmを測る。板式栓のため内面に螺旋がきられる。外面にエンボス文字「全乳 丹羽 養乳舎」「實用新案出願中 非賣 塚カ 加藤製」とある。明治22~32年頃。写真33は、磁器で底面に「西浦造」と手書きされる。西浦焼は、明治後期に多治見で焼かれたものである。写真23は、空襲で溶けたガラス瓶の破片である。

ビット(第15図13・写真35)

13は陶器小瓶で、口径1.8cm、器高4.1cm、底径2.3cmを測る。P34出土。



写真22 白玉

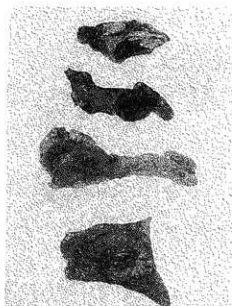
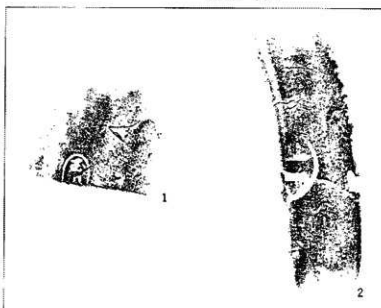
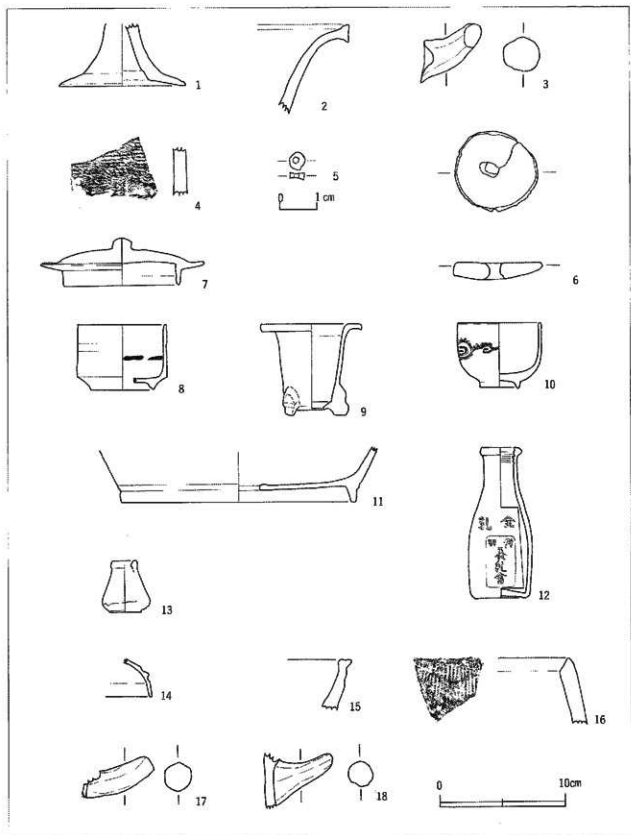


写真23 溶けたガラス



第14図 刻印拓影 (S=1/1)



第15圖 遺物実測図 (S=1/3)



写真24 土師器



写真25 土師器(?)

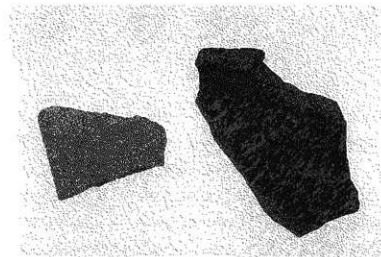


写真26 須恵器

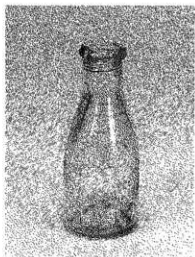


写真27 ガラス瓶

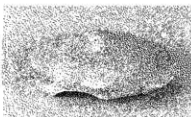


写真28 陶器

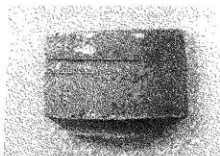


写真29 陶器

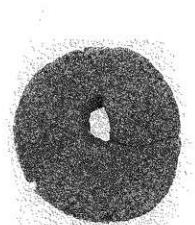


写真34 築造具



写真30 陶器



写真31 磁器

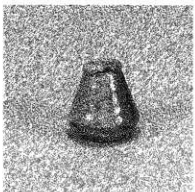


写真35 陶器



写真32 陶器



写真33 磁器

SD01 (第15図14~18・写真36)

14は須恵器坏身口縁部、15は須恵器鉢(?)口縁部で外面は青味のある橙灰色、内面、断面は橙灰色を呈する。16は須恵器甗又は鉢の口縁部で、外面タテハケ調整が施される。白灰色で焼成はあまり良くない。17は須恵器甗又は鉢の把手で、灰白色を呈する。18も須恵器甗又は鉢の把手で淡灰色を呈する。写真30-6、7は中世古瀬戸陶器、写真36右下は近世陶器皿で唐津焼である。

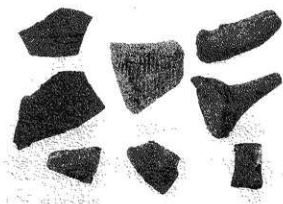


写真36 須恵器・陶器

SD02 (第16図1~21・写真38~44)

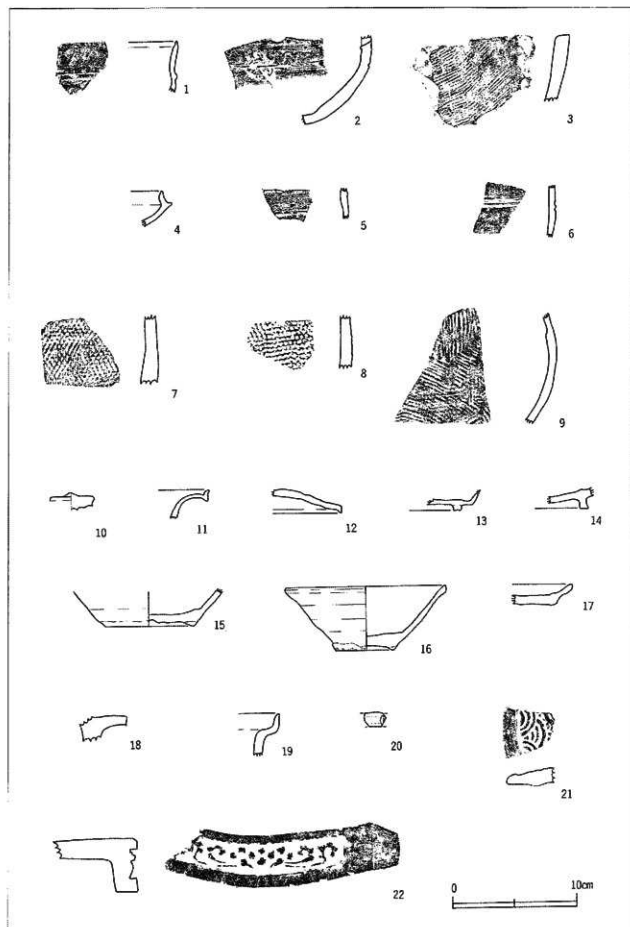
1~14は須恵器である。1は無蓋高坏又は鉢の口縁部波状文が施される。2は大形通で孔の上下に波状文が施される。体部下半はヨコナデ調整、底部近くはナデ調整が施される。3は甗又は鉢の口縁部で外面は平行タタキの後ヨコナデ調整が施される。4は坏身、5は外面に波状文が施される。外面、断面は灰色、内面はセピア色を呈する。7、8は外面に格子タタキが施される。淡青灰色を呈する。9は壺類の体部である。10は坏蓋鈕、11は長頸壺口縁部、12は坏蓋口縁部、13・14は坏身高台である。15・16は山茶碗の碗で、15は高台径6.8cm、16は口径12.7cm、器高5.6cm、高台径4.7cmを測る。内外面に長石粒の吹出しが著しい。高台に椀殻痕がつく。17は小皿で器高1.6cmを測る。18は陶器羽釜鈿のようであるが、窯道具の可能性もある。19は陶器の徳利口縁部で、大暦11期(井上編年)。20は土鉢、21は近代陶器の火消し壺蓋であろうか。橙褐色を呈する。

待遊所 (第16図22・写真37)

22は軒瓦である。火災を受け橙褐色を呈する。椀瓦には刻印が施される(第14図2)。他に炭化した布、蓋がある。



写真37 瓦



第16图 遺物実測図 (S-1/3)



写真38 須恵器



写真39 須恵器・陶器



写真40 須恵器

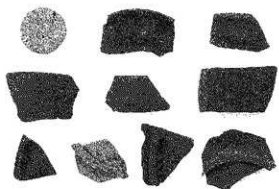


写真41 須恵器



写真42 山茶碗



写真43 山茶碗



写真44 陶器

3. 小 結

今回の調査で明らかになったことを3項目に分けまとめとする。

(1) 地山の削平と溝の検出

溝は、地山を削平し平坦になっているところに盛土により両肩を造り相対的に隆ませたものである。西端ではかろうじて削平を受けていない地山の高まりを検出しているの、調査区の西の方ではまた様相が異なっている可能性が高い。溝の形成された時期は、第16図に図示したように近世～近代と思われる遺物が数点出土していることから、近世以降とするべきであろうが、溝の肩を造る盛土中から出土する遺物は、中世以前の遺物であること、溝の上位に堆積した包含層から出土する遺物も中世までの遺物であることから、近世以降の遺物は、上位から掘り込まれたピット等の遺物であることも考えられ、溝の時期はひとまわず中世後半～近世初頭と考えておきたい。

第7次調査地点でも、中世後半に地山面を削平していることが明らかにされており、この付近では中世後半～近世初頭に大規模な造成工事が行われているようである。

この頃、当地域では1533年に織田信秀が古渡城を築城し、1610～13年には徳川家康が名古屋城を築城し城下町を建設している。また江戸時代に書かれた『金鱗九十九野壘』には、鎮西八郎が朝の子孫、市部太郎義季が古渡村市部の庄に居住していたこと、關森神社東方に「城戸口」「九丁堀」の地名が残り城館のあったことを示すものと記されている。今、市部庄がどの地域であるのかは明らかにされていないが、伊勢山中学校遺跡第4次発掘調査地点では、16世紀前半代に埋没した塚が検出されている。塚に囲まれていた城館は、古渡城築城以前にすでに廃城になっていたか、古渡城築城に際して破城になった可能性が考えられる。

今回の調査で明らかになった地山の削平工事や溝の構築も古渡城築城に関連しての周辺地域の開発とも考えられる。今後の課題としたい。

(2) 遺跡の消長

前項で述べたように、地山の削平を受けていたために、中世以前の遺構はわずかなピットを検出したに留った。包含層や溝の中からは、古墳時代中期から中世までの遺物が出土した。古墳時代中期の遺物としては、土師器高杯、格子タタキや縄目タタキの残る須恵器がある。滑石製白玉もこの時期のものであろう。古代では須恵器はあるものの灰種陶器はない。中世では、12～13世紀の山茶碗や13～14世紀の古瀬戸陶器がある。当地域にはかつては当該期の集落が営まれていたものと推定できる。近世では、城内や城下町の調査で見られるような廃棄土坑が検出されなかったため、陶磁器等もわずかであった。城下町絵図をみても本町筋から離れており、畑地や空き地であったのであろう。他に窯道具がある。この付近では、東古渡町遺跡第5次調査でも、窯道具や焼け帯のある製品が出土している。当地での窯業は、辻証二郎が1879年(明治12年)頃古渡夜寒の里(中区金山)において始めたときれる夜寒焼、元尾張藩土木全年録が1893年(明治26年)頃古渡東雲町(中区金山)付近で開窯して東雲焼がある。窯場の正確な位置は、明らかになっていないが、こうした窯場からもたらされたものであろう。

(3) 待避所について

今回の調査では、太平洋戦争当時構築された待避所(防空壕)が1基検出された。待避所は、家型の床

下、庭先、道端、公園や学校校庭など空き地、山や崖の斜面などに構築された。個々の家庭単位の小規模なものから、町内会や学校、工場など集団単位の大規模なものまでさまざまなものがある。

今回の検出された待避所は、長さ約2.4m、幅約1.2m、床面積2.88㎡、現地表面からの深さ約1.4mであった。断面の形、規模は第17図3とほぼ一致する。

発掘調査では、しばしば待避所が検出される。中区古沢町遺跡の待避所は、長さ約1.35m、幅約0.9m、床面積約1.22㎡、地山検出面からの深さ約1.0mを測る。正木町遺跡第1次調査の待避所は、長さ約6.72m、幅約1.2m、床面積約8.06㎡、地山検出面からの深さ約1.2mを測る。伊勢山中学校第6次調査の待避所は、長さ約3.0m、幅約1.0m、床面積3.0㎡、確認できる深さ約0.7mを測る。東洋紡績㈱名古屋工場内（当時愛知時計電機（軍需工場））であったことから工員用であろう。

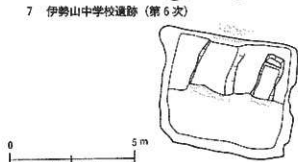
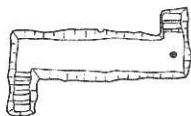
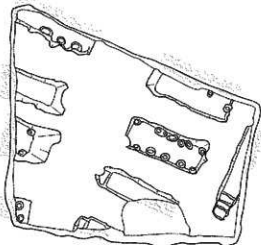
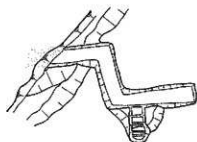
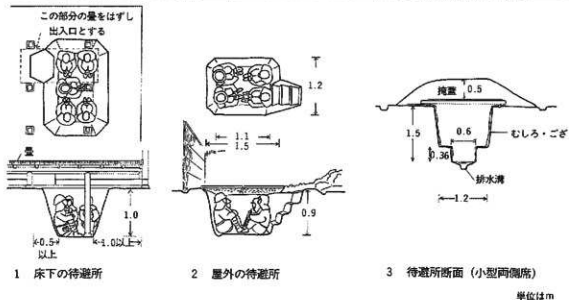
さて、待避所に収容できる人数は、何人か。『防空壕構築指導要領（昭和15年）』によれば、一人当たり床面積は1.5㎡とされる。この面積では、古沢町遺跡の場合1人未満となる。国の基準はややゆったりとしたものか。古沢町遺跡では、実際に中に2人入ってもらったがまだ余裕があった（写真45）。「時局防空必携」を解説した『写真週報 第二百八十三號』（昭和18年）に掲載された挿絵（第17図2）から、床に座る姿勢で収容する場合の1人当たり面積を算出すると、0.22㎡である。今回の待避所の場合、13人となる。豊橋市の陸軍歩兵第18聯隊本部跡地（吉田城址）で検出された待避所は、出入口の奥は爆風の影響を受けるため、ここを空けて腰掛が作られていた。このような場合で計算し直すと、有効面積は1.7m×1.2m÷2.04㎡となり、0.22で除すると9人となる。腰掛があったと想定した場合（腰掛材は検出されていない）、片側席有効長1.7mで一人当たりの長さ0.45m（『防空壕構築指導要領』、『日本防空史』では0.45～0.6m）で除すると3人となる。幅1.2mは、両側席が可能となる（第17図3）ため、6人となる。同様に正木町第1次調査の待避所は、それぞれ27人、22人となる。よって、共同利用（複数世帯用）のものと推定される。ただし家財道具を持ち込む場合はこの限りではない。

今回検出された待避所は、内部の壁材や床材が残存していた。火災にあい、戦後板材等を再利用することなく埋められたためと思われる。板材が検出された例として、吉田城址のほか守山区小幡遺跡が知られる。

なお、当地が空襲にあい焼失したのは、昭和20年5月17日である。この空襲で正木国民学校も焼失している。

遺跡名	床座りの場合	腰掛席の場合	席のタイプ	床幅
正木町遺跡第8次	9人	6人	両側席	1.2m
古沢町遺跡	4人	3人	片側席	0.9m
吉田城址	—	6人	片側席	1.0m
正木町遺跡第1次	27人	22人	両側席	1.2m
伊勢山中学校遺跡第6次	13人	6人	片側席	1.0m

第8表 待避所収容人数（目安）



第17図 待避所の構造と調査事例



写真45 古沢町遺跡待避所



写真46 調査地遠景（左下）

図版出典

第17図（原図トレース 一部略）

- 1・2 『寫真週報 第二百八十三號』1943年 情報局編輯
- 3 『日本防空史』1981年 原書房
- 4 『古沢町遺跡発掘調査概要報告書』1995年 名古屋市教育委員会
- 5 『古田城址（丁）』1994年 豊橋市教育委員会
- 6 『正木町遺跡第5次調査の概要』1996年 名古屋市教育委員会
- 7 『伊勢山中学校遺跡—第6次発掘調査の概要—』1997年 名古屋市教育委員会
- 8 『正木町遺跡発掘調査概要報告書』1986年 名古屋市教育委員会

第IV章 第9次調査の概要

1. 調査の経過

第9次発掘調査は、名古屋市中区正木二丁目に所在する正木公園の北西角入口に防火水槽を埋設する名古屋市消防局の事業に先立って実施した。平成8年度当初から事業は計画されていたが、調整の結果調査に着手したのは平成9年11月25日で、平成9年12月19日をもって現地での作業を終了した。

調査地点は遺跡範囲の南東端近くに位置している。対象面積は約100㎡と狭い範囲ではあるが、この付近の調査例は昭和57年度の試掘調査と第7次調査くらいである(第4図参照)。また本遺跡の南隣にひろがる伊勢山中学校遺跡の第4次調査が今回の地点より100m離れた位置で実施されている。

以下、調査の経過を日記抄の形式で記しておく。

- 11月25日 調査開始日。準備工(～28日まで)。
- 12月1日 表土除去。リサイクルする部材を破損しないよう除去するの予聞取る。基準点測量(業者委託)、事務所設置。
- 2日 表土除去終了。想像以上に擾乱がひどい。包含層の残存状況はきわめて悪く、調査区中央などで部分的に残る程度。
- 3日 擾乱を機械などで掘削した後、黒褐色粘質土の包含層掘削に入る。
- 4日 包含層掘削および遺構検出作業。ピットを中心に相應の数の遺構を検出。(～5日まで)
- 8日 雨のため作業中止。
- 9日 遺構検出作業終了。遺構掘削開始。P9より須恵器杯蓋など出土。
- 10日 遺構掘削。S K01より赤焼けの須恵器の小皿出土。S X01は遺構が重複している可能性が高く精査するが確認できず。
- 11日 遺構掘削終了。調査区壁面の清掃。
- 12日 調査区全体の清掃。S X01セクション・基本土層の写真撮影および作図。
- 15日 全景写真撮影。平板測量を開始。
- 16日 平板測量終了。エレベーション測量。
- 17日 後片付け工(～18日まで)。
- 19日 事務所撤去。現地作業終了。

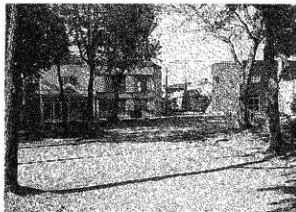


写真47 調査前状況(南東から)

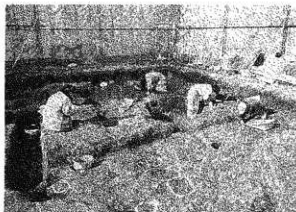
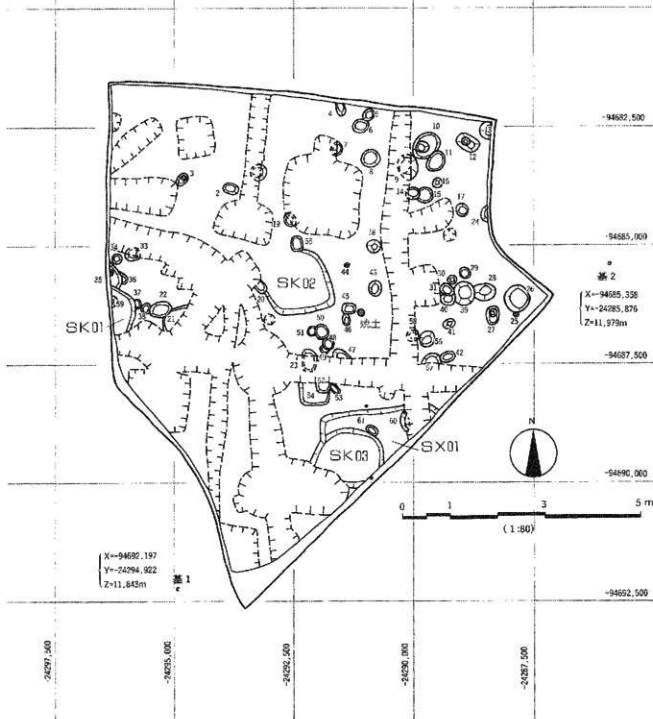


写真48 調査風景



第10図 遺構平面図

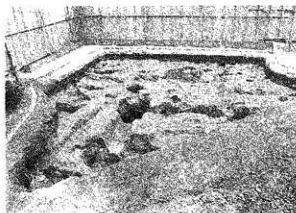


写真49 完掘状況 (南から)

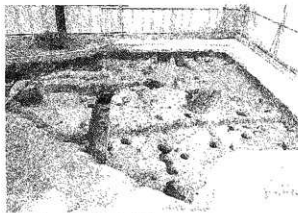


写真50 完掘状況 (東から)

2. 土層

現地表面（舗装ブロック等は除く）から地山面まで約50cmと、台地上としては平均的な堆積状況であったが、それを構成するほとんどが現代土層で占められていた。包含層と思われる土層は、調査区の西側から中央付近にかけて黒褐色～暗褐色粘質土がわずかに残る程度であった。壁面にこの包含層が確認できたのは西側の部分だけであったため、基本土層は調査区北・西壁で観察した（第19図・写真51）。

基本土層は地表面より現代土層1、現代土層2¹³、黒褐色～暗褐色粘質土の包含層と重なって、橙褐色の基盤層に続く。この黒褐色土から須恵器や土師器、灰軸陶器片が出土していることから、古墳時代～古代の包含層と捉らえた。これ以降の時期の遺物を含む土層は確認できず、近現代に削平されたと思われる。だが、第19図10層などは、過去の調査例から、近世に相当する土層である可能性がある¹²。

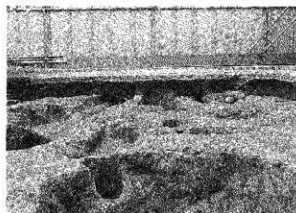
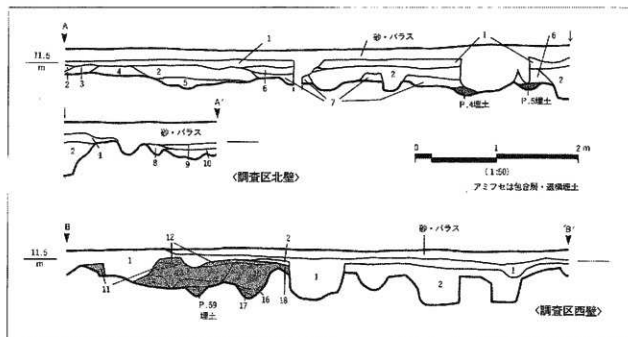


写真51 調査区西壁



第19図 基本土層断面図

（土層注記）

1. 赤茶褐色土(現代土層1)、2. 褐色土(現代土層2)、3. 黒灰色土+地山ブロック、4. 黒灰色土+褐色粘質土、5. 黒灰色土、6. 褐色土+地山ブロック、7. 暗褐色土+地山ブロック、8. 灰褐色土、9. 暗褐色土、10. 灰褐色砂質土、11. 暗褐色土、12. 茶褐色土、13. 茶褐色土+赤色粒(SK01埋土)、14. 黒褐色土(SK01埋土)、15. 暗茶褐色土+赤色粒(P35埋土)、16. 15層+炭化物(P35埋土)、17. 暗茶褐色土+地山ブロック(P35埋土)、18. 暗褐色土

3. 遺構と遺物

調査区全体に擾乱が存在していたため、遺構・遺物の残存状況は悪かった（第18図・写真49・50）。

遺構はほとんどが基盤層上面での検出となった。土坑(SK)3基、ピット61基、土坑状の落込み(SX)1基を検出した。遺物はコンテナケースにして2箱程出土した。SK3基、SX1基、ピット35基、包含層からの出土である。概ね古墳時代～古代に属するもので、中世以降の遺物は確認できなかった。ほとんどが破片資料で、器形全体を知り得る遺物はごく少数である。（第21図/写真57/表9・10）

SK01（写真52）

調査区西端に位置する。一部調査区外に続くため正確な形状はわからないが、方形に近い形状を呈するものと思われる。埋土は暗褐色の締まりのある土に地山ブロックと焼けた粘土のような赤色粒が混じる。遺構の性格は不明である。

遺物は少ない。縄文土器・須恵器・土師器・灰釉陶器の小破片が少量出土している。赤焼けの須恵器の椀（第21図1）が唯一器形を知り得る資料である。底面に近い埋土中の出土で、径の小さい底部、多少丸みが残るが直線的な体部、外反する口縁部に灰釉陶器の影響が見える⁶。

この遺構の具体的な時期ははっきりしないが、9世紀後半以降に比定される尾張系灰釉陶器の小片が出土している。

SK02（写真53・54）

調査区のほぼ中央に位置する。方形を呈するが北西角の立ち上がりは確認できなかった。埋土はSK01と同様、遺構の性格は不明。

出土遺物は縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器の小破片である。量的には土師器片が多く、甕の胴部破片に混じり、甕の把手（第21図8）等も出土している。また、白色軟質で外面に縄目と思われるタタキ目をもつ須恵器片が数点出土している⁶。後述のSX01からもこれとよく似た資料が出土している。

所属時期は不明瞭だが、埋土がよく似ていることからSK01とほぼ同時期かと思われる。

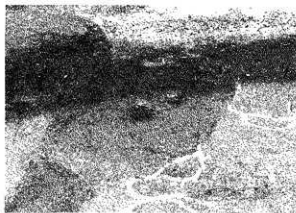


写真52 SK01遺物出土状況（東から）



写真53 SK02完掘状況（東から）



写真54 SK02断面（西から）

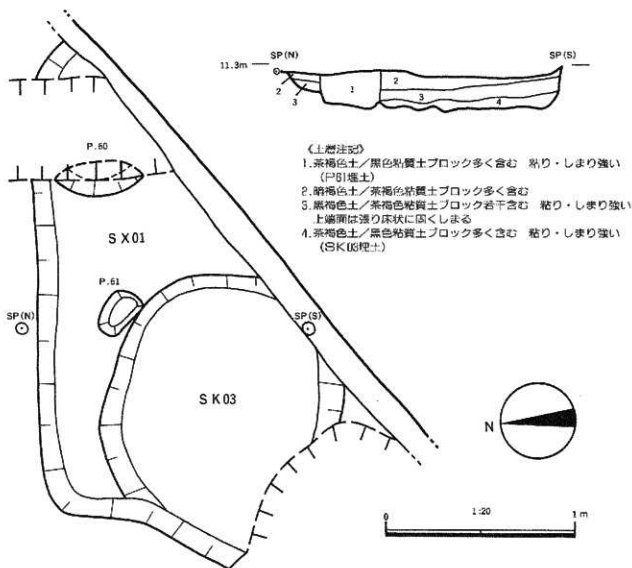
S X 01 (第20図/写真55)

調査区の南端に位置する。調査区外に遺構範囲が及んでいるため、全体の形状は正確に捉えられない。埋土は黒みが強い暗褐色粘質土に地山ブロックと赤色粒が混入したものである。検出段階では、推定される遺構範囲の大きさや形状から、住居の可能性も考えていたが、溝溝などの特徴的な付属施設を伴わなかったため、性格不明の遺構としてSXとした。

また、SX01を検出した段階では確認できなかったのだが、精査するうちにP60・61を、断面の状況からSK03をそれぞれ検出した。ピットはどちらもSX01よりも後の掘削である。SK03はSX01に切られていることから、SX01に先行すると判断した。しかし検出が遅れてしまったために遺物はSX01のものと同様にしてしまい、SK03の詳細は把握できなくなった。



写真55 SX01断面(西から)



第20図 SX01遺構状況図

遺物は、このため、SX01としてSK03に属するものも取上げている。量はあるが小破片の資料が主である。弥生上器・須恵器・土師器・灰軸陶器の破片が出土している。なかでも須恵器片が目立ち、古墳時代に属するものが多い(例として第21図10~12など)。縄のタタキ目(同図16)などの、いわゆる初期須恵器の特徴をもつ破片も数点あった。同図17・18は16と同じくタタキ目に特徴があるが、これは土師器胎土に施されている。また図示しなかったが特式系土器らしい小片も1点出土している

遺物の時期は、9世紀後半以降の尾張系灰軸陶器の小片が埋土上部(第20図2層に相当する)より出土していることからSX01が古代、SK03はそれ以前に属すると思われる。

ピット

ピットは全部で61基検出した。そのほとんどは地山面で検出した。地山面からの掘削の深さは浅いものが多いが、P2・8・9・18・19・23・48はかなり深く掘りこまれており、およそ40~50cmを測った。

しかし、掘立柱建物跡などのなんらかの意味を示すような配列は確認できなかった。

ピットは調査区全域で検出したが、南西部分では1基も存在していない。大きな擾乱が多いこともあるが、もともと希薄な部分だったと考えられる。

遺物が出土したピットは35基と検出総数の約半数である。ほとんどは破片資料、しかも小破片が単独で出土している。そのなかでP9は、埋土上部より須恵器平瓶胴部破片(第21図4)、埋土中ほどから須恵器杯蓋(同図2)・土師器甕胴部破片(同図14)といった、比較的残りのよい資料が出土しており、目立つ存在である(写真56)。遺物が数量的にまとまっているピットとしては、P9のほか、P1・8・23・26・35・48・52がある。これらのピットは須恵器片・土師器片を主体的に出土しているが、どちらかという土師器片の方が多い。またP35は須恵器の釜ツマミ部分(同図3)など2、3点須恵器片が出土しているが、そのほかの1数点は8世紀代の甕の破片(同図19~21)で占められている。

ピットの詳細な時期は、全体的にははっきりしないが、ほとんどのピットの埋土は黒褐色~暗茶褐色を呈し地山ブロックなどが混じるといった共通性がある。包含層によく似た土であることから、多くのピットは古墳時代~古代に属するものと思われる。

包含層

包含層の残存状況が悪かったことは既に述べたが、遺物は縄文土器~灰軸陶器にいたるまでの破片資料が出土している。須恵器片・土師器片が多かった。第21図5は須恵器高杯形器台の一部である。破片資料だが、その左右と上の端部は透かしの部分にあたるようで、丁寧に仕上げられている。また、正木町遺跡では過去何度か縄文土器片が出土しているが、同図22は珍しく文様が残る。深鉢の口縁部であるが、その沈線文から縄文時代中期末に比定できるとされる¹⁵⁾。

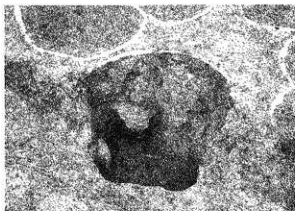
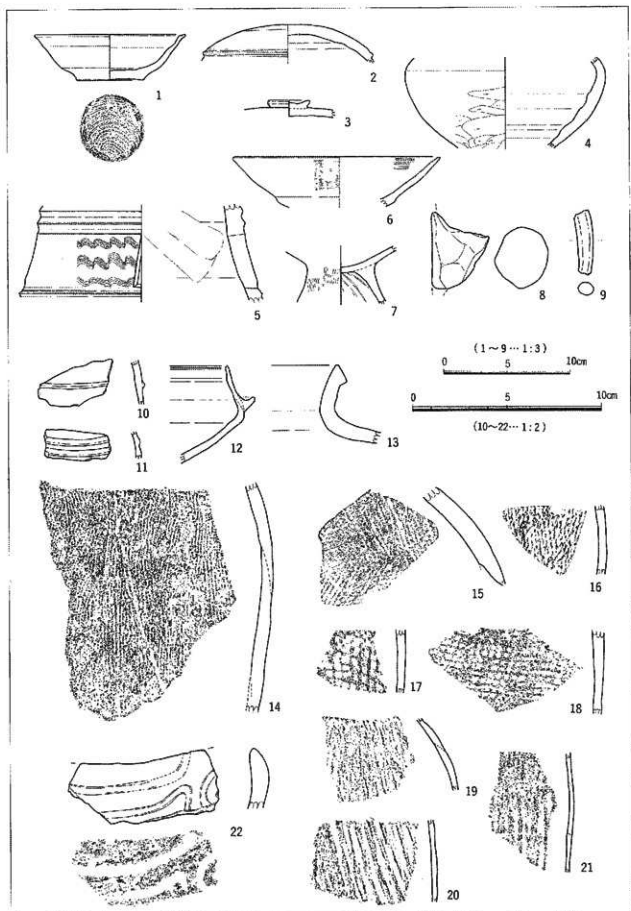


写真56 P9遺物出土状況

遺構名	種 土	形状	出土遺物	備 考
PH1	黒褐色(粘質)	円	弥生土器・須恵器・土師器	
2	黒褐色(粘質)+地山ブロック	楕円	須恵器・土師器	
3	黒褐色(粘質) 地山ブロック	楕円	土師器	
4	黒褐色(粘質)+地山ブロック(少)		弥生土器?	一部調査区外
5	黒褐色(粘質)+地山ブロック(少)		土師器	一部調査区外
6	暗褐色+地山ブロック(多)	円	須恵器	
7	暗茶褐色	円		
8	暗茶褐色	円	須恵器・土師器	
9	黒褐色(粘質)	楕円	須恵器・土師器	
10	暗茶褐色+地山ブロック(少)/赤色粒	楕円	須恵器・土師器	
11	暗褐色+地山ブロック(多)	楕円		
12	黒褐色(粘質)	円	須恵器・土師器	
13	黒褐色(粘質)		須恵器・土師器	一部調査区外
14	暗茶褐色+地山ブロック			
15	暗茶褐色+地山ブロック(少)/赤色粒	円	土師器	
16	暗褐色	円		
17	暗褐色+地山ブロック	円	弥生土器	
18	黒褐色	円	須恵器	
19	黒褐色		土師器	
20	暗褐色+地山ブロック	方形		
21	茶褐色	方形	土師器	
22	暗褐色+地山ブロック(少)	楕円		
23	暗茶褐色+赤色粒		須恵器・土師器	
24	暗褐色+地山ブロック(少)			一部調査区外
25	茶褐色+地山ブロック	円	土師器	
26	黒褐色	円	土師器	
27	茶褐色+地山ブロック	楕円	須恵器・土師器	
28	暗褐色 地山ブロック	方形	須恵器・土師器	
29	暗褐色+地山ブロック	円	須恵器・土師器	
30	暗褐色+地山ブロック	円		
31	灰褐色			遺構以降か
32	暗褐色+地山ブロック	楕円		
33	暗褐色+地山ブロック	円		
34	暗褐色+地山ブロック(多)	円	弥生土器・土師器	
35	暗茶褐色+赤色粒	方形	須恵器・土師器	
36	暗褐色		土師器	
37	暗褐色			
38	暗褐色+地山ブロック(多)	円		
39	暗茶褐色+地山ブロック	円		
40	暗茶褐色+地山ブロック	円	土師器	
41	暗褐色+地山ブロック	楕円		
42	暗茶褐色+地山ブロック(多)	楕円	土師器	
43	灰暗褐色+地山ブロック	円		遺構以降か
44	暗褐色+地山ブロック			
45	暗褐色+地山ブロック	方形	土師器	
46	暗茶褐色+赤褐色	楕円	土師器	
47	暗茶褐色+地山ブロック(多)			
48	暗茶褐色+地山ブロック(少)/赤色粒	円	縄文土器・土師器	
49	赤褐色+地山ブロック			
50	暗褐色+地山ブロック		須恵器・土師器	
51	黒褐色(粘質)			
52	灰暗褐色+地山ブロック		土師器	P54埋土下面検出
53	暗茶褐色+地山ブロック	長方形	土師器	
54	暗茶褐色+地山ブロック(少)/赤色粒			
55	暗茶褐色+地山ブロック			
56	暗茶褐色+地山ブロック	円		
57	暗褐色+地山ブロック		須恵器	
58	暗茶褐色+地山ブロック		土師器	
59	暗褐色			S K01埋土下面検出
60	茶褐色+地山ブロック(多)		弥生土器	S X01埋土下面検出
61	茶褐色			S X01埋土上面検出
S R01	暗褐色+地山ブロック/赤色粒	方形	縄文土器・須恵器・土師器・灰陶器	一部調査区外
62	暗褐色+地山ブロック/赤色粒	方形	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器	
63	茶褐色+黒褐色粘質ブロック		S X01土師器	S X01埋土下面検出
S X01	暗褐色+地山ブロック		弥生土器・須恵器・土師器・灰陶器	一部調査区外

第9日表 日次調査検出遺構一覧(番号は第18図対応)



第21圖 出土遺物

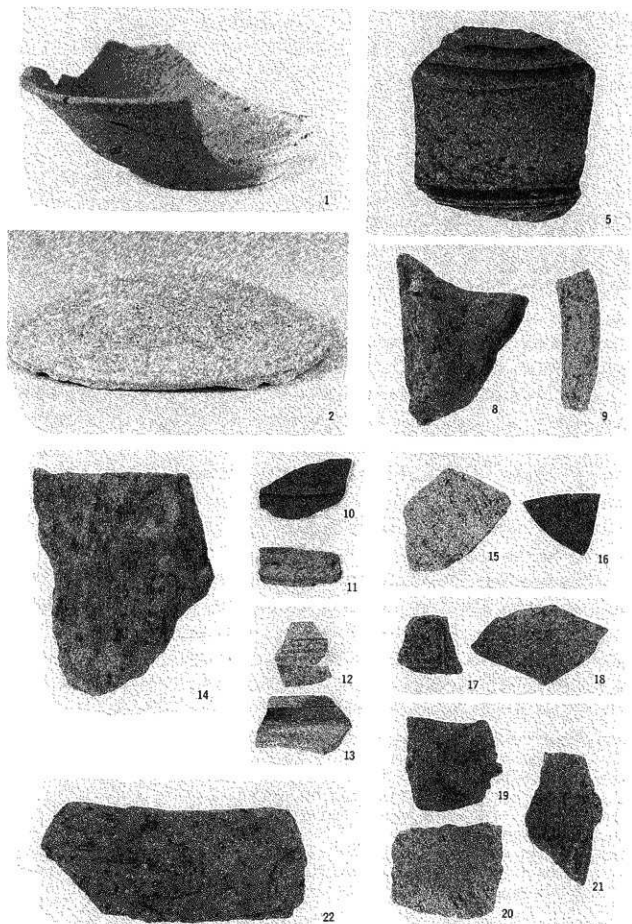


写真57 出土遺物（番号は索引図に対応）

番号	出土位置	種別	形状	残存部分	色	調査	備考
1	S K01	灰土層	柱礎	柱礎一残部	赤褐色	礎野に灰土層の影響/礎底面	9世紀前半
2	P 9	灰土層	柱礎	大井筒	赤褐色	柱礎ヘラタテリ	6世紀後半～7世紀前半
3	P 15	灰土層	柱礎	大井筒(ツツミ)	赤褐色	柱礎ヘラタテリ	8世紀中葉(古)
4	P 9	灰土層	柱礎	大井筒	赤褐色	下子ヘラタテリ	7世紀後半
5	瓦倉跡	瓦	瓦	瓦	赤褐色	須賀川/海沿路瓦葺/瓦葺	
6	P 18	土師器	埴	白漆部一残部	赤褐色	ナゲ	
7	P 17	土師器	白土器	赤土器	赤褐色	ナゲのあとナゲ/白土器ナゲ	
8	S K02	土師器	灰土層	灰土層	赤褐色	コヒツナ/コヒツナ	
9	組合地	土師器	コップ	コップ	赤褐色	コヒツナ	
10	S X01	土師器	コップ	コップ	赤褐色	コヒツナ	
11	S X02	土師器	コップ	コップ	赤褐色	コヒツナ	
12	S X03	土師器	コップ	コップ	赤褐色	コヒツナ	
13	P 1	土師器	埴	埴	赤褐色	埴	6世紀後半
14	P 9	土師器	埴	埴	赤褐色	埴	8世紀後半～9世紀
15	P 23	土師器	埴	埴	赤褐色	埴	5世紀後半～7世紀前半
16	S X01	土師器	埴	埴	赤褐色	埴	
17	S X01	土師器	埴	埴	赤褐色	埴	
18	S X01	土師器	埴	埴	赤褐色	埴	
19	P 15	土師器	埴	埴	赤褐色	埴	8世紀 瓦葺
20	P 15	土師器	埴	埴	赤褐色	埴	9世紀 瓦葺
21	P 15	土師器	埴	埴	赤褐色	埴	9世紀 瓦葺
22	瓦倉跡	瓦	瓦	瓦	赤褐色	瓦	瓦葺

第10表 日次調査遺物観察表(番号は第21図対比)

4. 小結

第9次調査の結果を、今回の地点から南北100m以内で実施された①昭和57年度正木小学校試掘調査、②伊勢山中学校遺跡第4次調査と比較してみる(第4図参照)。

①の地点は本調査地点の北向かいにあたり、近世・近代の遺構遺物と黒褐色土包含層(ただし未調査で保存)を検出しており、近接した部分であるが上層状況は今回と異なっている。これは、①地点は明治40年以降学校敷地(グラウンド)として、本地点は戦後公園整備されるまで宅地として活用されたという違いによる(付録参照)。今回現代土層とした部分には、大量の炭化物や建築廃材とともに須恵器・土師器片が混入していたが、これは公園整備の際に掘削し、撤去された建物のゴミも一緒に土均しをしたためと思われる。しかし、本調査や①地点での結果から、この付近では擾乱を受けていても黒褐色土包含層は現存している可能性が高いと考えられる。

本調査地点の南100mに位置する②の地点では、大規模な中世溝が調査区全体に走っている状況が検出された。この溝は調査区北壁に抜けていたため、今回の調査で続く部分や何かしら関連のある中世遺構が検出される可能性はあった。しかし今回の調査では、中世溝特有の埋土に相当する土層^{註1)}や中世に属する遺構遺物は見られなかった。擾乱が多かったことを考慮しても、もともと存在しなかった可能性の方が高い。今後この付近の中世溝の平面的な展開やこの時期の土地利用を考える上で、一つの手掛かりになるだろう。

註1) 現代土層¹⁾には塩化ビニール製排水管等、現代土層²⁾には土管・昭和15年の一銭硬貨・戦時中によく使用された炬燵な建築部材等がみられる。

註2) 正木町遺跡では灰褐色土から近世遺物が出土することが多い。
 註3) 尾野善裕氏のご教示による。また、灰釉陶器片等についてもご助言いただいた。
 註4) 接合できなかったが同一個体の可能性が高い。表置の状態は悪く、種類は不明。
 註5) 当館学芸員・伊藤正人の観察による。
 註6) 城ヶ谷(1900)の文献による。
 註7) 正木町遺跡ではこれまでに、第3・4・8・日次および1986年の南山大調査で中世溝が検出されている。市教委調査分についてはその報告で、中世溝の埋土は地山ブロックが均一に混じる茶褐色土とある。

付編 近世以降の正木町遺跡付近の様相

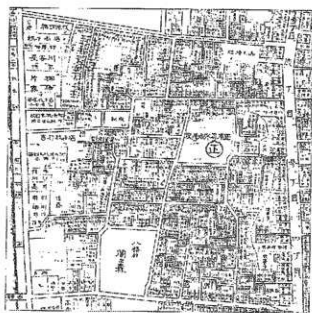
正木町遺跡では小規模な発掘調査が多く、どの時代についても断片的にしか把握できないのが現状である。しかし、近世以降については文献や絵図等の資料と発掘調査の成果と照らし合わせることで、人々の暮らしぶりをかなり詳しく知ることができる。正木町遺跡での調査は今後も断続的に行われていくと思われ、調査の際の手掛かりになるよう、まとめにかえて近世以降の遺跡付近の様相を簡単にだが触れておく。

正木町遺跡の範囲は、現在の古渡町および正木一・二丁目付近で、山王通を北限、伏見通を東限、堀川東岸の台地上を西限、開森八幡社の裏道より一本北の路地あたりを南限としている(第4図参照)。ここではやや南限を延ばして古渡橋に続く道まで含め、この区域の移り変わりを見ていこうと思う。

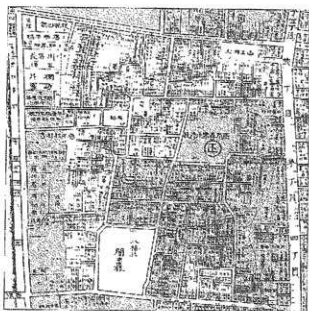
江戸時代 この区域は愛知郡古渡村の一画であった。古渡の名は、かつてこの里の西の入り江から海部郡大口尊へ参拝客が渡航していたことに由来する。堀川開削の際に多少耕地面積が減ったものの、田畑が広がる農村であった。1664(寛文4)年、古渡橋上流の堀川沿いに木場がおかれ、木場屋敷とよばれる町屋ができた。木材関連業の始まりである。しかし、遺跡範囲である台地上には畑地が広がっており、家屋は少なかったようだ。35年後の1709(宝永6)年に描かれた「尾州名古屋図」では堀川岸に「御材木場」とあるが、その他は「開森八幡」「(山王) 稲荷」以外に畑とあるだけである。しかし、名古屋城下が繁栄拡大するにつれ、熱田神宮へと続く道(本町筋、いまの伏見通)沿いにあったこの村は徐々に都市化していった。1726(享保11)年、本町筋付近は町方支配となり城下とほぼ同じ扱ひとなる。数年後の1732(享保17)年には山王稲荷の南に葛町遊郭も作られている。寺院や町屋も増加し、武士の下屋敷も点在していたことが明和・安永年間(1764～1781)に作成された「尾州名古屋御城下之図」からも窺える。天保年間(1830～1844)には本町筋沿いに寺院と町屋が並び、その西には武家下屋敷が並ぶ西屋敷筋ができ、堀川沿いには木場が集中する(第22図)。しかし「農商兼たる者」が多く、開森八幡社の北付近には畑地が残っていた。

明治・大正時代 1871(明治4)年廃藩置県が行われ、この区域は名古屋県古渡村となった。その後古渡村から古渡町・正木町として独立し、1878(明治11)年・1889(明治22)年・1908(明治41)年に行政区分・名称が変更になっている。このころ、堀川沿いに製材・木工業が繁栄し、本町筋は商店街として賑った。細い路地が増加し、宅地化が進み小規模家屋が建てこんでいた。1885(明治18)年前後の地籍図では(第23図)主な道筋は変化がないが、畑地が減って島状に残っている状態である。明治の終わり頃、大津通(東別院の東の通)に市電が開通すると、本町筋の商店街が東へ移動していき、ますます住宅地としての性格を色濃くしていく。なお、1907(明治40)年に正木小学校が現在の敷地に創立されている。

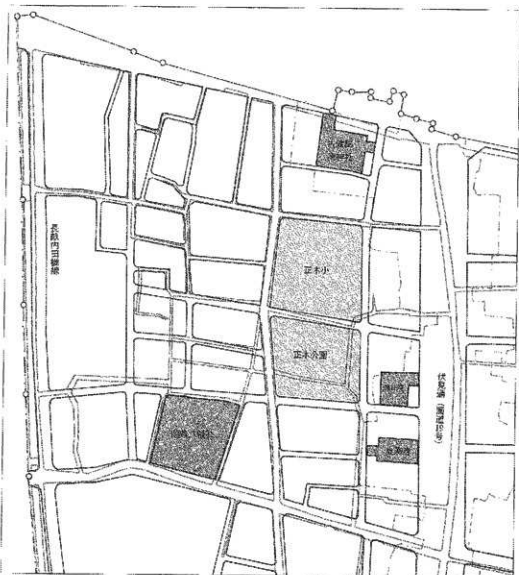
昭和時代 1933(昭和8)年ごろの地図では(第24図)、畑地はほぼ消滅し、かなり込入って家々が並ぶが主な道筋は相変わらずである。戦時中は、市街地や南方(現在の伊勢山中学校のあたり)の東洋紡績名古屋工場を目標とした空襲で被害を受けている(第25図)。最も被害を受けたのは1945(昭和20)年5月17日の空襲であった。空襲から避難するための防空壕を各家屋の下につくっていたようで、現在の正木公園部分では家屋が消失し、防空壕がむき出しになった上にバラック小屋を建ててしばらく人々が暮らしていたらしい。戦後、復興事業の一環で区画の再整理が行われ、主たる道路の拡張や路地の整理、正木公園の整備などがおこなわれ、現在の区画となった。現行の住居表示になったのは1980(昭和55)年である。戦後も敷地面積が狭い家屋が立ち並んでいたが、次第に町上場や事務所、集合住宅に変わりつつある。



第24図 元和己（1833）年頃の様子



第25図 空襲による焼失範囲（アミフセ部分）



第26図 戦前・戦後の区画の押し（濃い線が戦前 1:4000）

参考文献

正木町遺跡について

- 稲垣晋也 1957 『愛知県名古屋市正木町遺跡』『日本考古学年報』5
伊藤禎樹 1969 『正木町遺跡調査速報』『名古屋考古学会会報』2
伊藤禎樹 1991 『尾張正木町遺跡出土の初期須恵器』『韓式土器研究』Ⅲ
名古屋市教育委員会 1983 『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
名古屋市教育委員会 1986 『正木町遺跡発掘調査概要報告書』
名古屋市教育委員会 1988 『正木町遺跡第2次発掘調査概要』
名古屋市教育委員会 1989 『正木町遺跡第3次発掘調査概要』
名古屋市教育委員会 1991 『正木町遺跡第4次発掘調査概要報告書』
名古屋市教育委員会 1996 『正木町遺跡-第5次調査の概要-』
名古屋市教育委員会 1996 『正木町遺跡第6次発掘調査概要報告書』

伊勢山中学校遺跡について

- 名古屋市教育委員会 1984 『伊勢山中学校遺跡発掘調査概要報告書』
名古屋市教育委員会 1985 『伊勢山中学校遺跡Ⅱ-昭和59年度校舎増築に伴う発掘調査の概要-』
名古屋市教育委員会 1987 『伊勢山中学校遺跡第3次発掘調査概要報告書』
名古屋市教育委員会 1989 『伊勢山中学校遺跡-第4次調査概要-』
名古屋市教育委員会 1996 『埋蔵文化財調査報告書24 伊勢山中学校遺跡(第5次)』
名古屋市教育委員会 1997 『伊勢山中学校遺跡-第6次発掘調査の概要』

正木町遺跡周辺の地理について

- 小田切忠近 1841 『天保年間名古屋市街図』
梶川勇作 1997 『近世尾張の歴史地理』企画集団N A F
名古屋市 1916 『名古屋市史』地理編
1933 『名古屋市居住者全図』
名古屋市立正木小学校 1979 『まきま』
名古屋市土木局 1987 『愛知県名古屋地区地籍全図(複製版)』
名古屋市計画局 1984 『戦災復興誌』
名古屋市計画局 1992 『なごやの町名』
愛知県陶磁資料館 1995年 『名古屋のやきもの』
あいち・平相のための戦争展 1996 『戦時下・愛知の諸記録96』
尾野善裕 1997 『雑投窯と西三河の窯跡』『第1回三河考古合同研究会 須恵器から灰輪陶器へ-生産地と消費地から-』三河考古刊行会
尾野善裕 1997 『尾張・西三河(窯跡) 雑投・尾北・その他』『古代の上器5-1 7世紀の上器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会
齊藤孝止 1995 『I 東海西部(愛知・岐阜)』『須恵器集或図録』第3巻・東日本編 I
城ヶ谷和広 1990 『古代尾張の上器器-6世紀後半から11世紀の様相-』『年報・平成2年度』愛知県埋蔵文化財センター
杉村善治 1994 『美濃焼物と西酒門治』『美濃の古陶 美濃古窯研究会報No.7』美濃古窯研究会
木井宏幸 1996 『大毛沖遺跡からみた古代の土器』『大毛沖遺跡 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66号』
名古屋空襲を記録する会 1979 『名古屋空襲誌第6号』
名古屋市教育委員会 1998 『埋蔵文化財調査報告書28 小幡遺跡(第1・2次)』
名古屋市教育委員会 1994 『東古瀬戸遺跡第5次発掘調査概要報告書』
藤沢良祐 1984 『“古瀬戸”概説』『美濃陶磁史館報』Ⅲ
藤沢良祐 1991 『瀬戸古窯址群Ⅱ-古瀬戸後期様式の福年-』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X
宮瀬龍司・古橋佳子 1991 『大瀬遺跡出土の土鍾について』『大瀬遺跡 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18号』

名古屋市文化財調査報告 既刊目録

I	H-101号古窯跡発掘調査報告	1973
II	古沢町遺跡発掘調査報告 一 弥生時代編一	1974
III	御影町古窯跡群発掘調査報告	1974
IV	有松町並み調査報告	1975
V	NK I-34号古窯跡発掘調査報告	1975
VI	徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告書	1976
VII	光光寺古窯跡発掘調査報告書	1979
VIII	小幡古墳発掘調査報告書	1980
IX	NN-278号古窯跡発掘調査報告書	1981
X	民俗文化財調査報告書(名古屋市内の山車と神輿)	1981
XI	NN-314号古窯跡発掘調査報告書	1981
XII	NN-282号古窯跡発掘調査報告書	1982
XIII	NN-268号古窯跡発掘調査報告書	1983
XIV	笹ヶ根古墳群発掘調査報告書	1984
XV	民俗文化財調査報告書(名古屋の石造物)	1985
XVI	天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書	1985
XVII	尾張元興寺遺跡発掘調査報告書	1985
XVIII	天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書	1986
XIX	吉根地区埋蔵文化財発掘調査報告書	1986
XX	高蔵遺跡発掘調査報告書	1987
21	白鳥古墳第Ⅱ次発掘調査報告書	1989
22	志段味地区民俗調査報告書	1989
23	茶臼山古墳発掘調査報告書	1990
24	埋蔵文化財発掘調査報告書	1993
25	鳴海地区須原宮発掘調査報告書	1994
26	名古屋市山車調査報告書1(新井町湯取車)	1994
27	NN330号窯発掘調査報告書	1994
28	尾張元興寺跡発掘調査報告書	1994
29	名古屋市山車調査報告書2(若宮まつり 福祿寿車)	1995
30	名古屋市山車調査報告書3(竹立天王まつり 牛瀬天王車)	1996
31	埋蔵文化財調査報告書24(伊勢山中学校遺跡 第5次発掘調査)	1996
32	埋蔵文化財調査報告書25(高蔵遺跡 第8次・第9次他)	1996
33	名古屋市山車調査報告書4(有松まつり 布袋車・唐子車・神功車)	1997
34	埋蔵文化財調査報告書26(高蔵遺跡 第12次～第15次)	1997
35	埋蔵文化財調査報告書27(天白元屋敷遺跡 第3次)	1997
36	埋蔵文化財調査報告書28(小幡遺跡 第1・2次)	1998
37	名古屋市内寺院の仏画	1998
38	埋蔵文化財調査報告書29(止木町遺跡 第7次～第9次)	1998

報告書抄録

ふりがな	まいぞうふんかざいはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名	正木町遺跡(第7次～第9次)							
巻次	29							
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	38							
編著者名	伊藤厚史・田原和美							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223							
発行機関	名古屋市教育委員会							
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052-972-3268 FAX 052-972-4178							
発行年月日	西暦 1998年3月20日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	'''	'''	m ²		
正木町遺跡	名古屋市中区正木二丁目804	23100	7-19	35°08'44"	136°53'44"	1997.4.7～ 1997.4.22	約80	倉庫
	名古屋市中区正木二丁目1119-3			35°08'46"	136°53'54"	1997.9.1～ 1997.10.3	約80	個人住宅
	名古屋市中区正木二丁目12正木公園内			35°08'47"	136°54'44"	1997.11.25～ 1997.12.19	約100	防火水槽
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
正木町遺跡	散布地 貝塚	中世 近代	ピット	須恵器片 陶器片	第7次調査			
		中世 近代	溝 待避所	白玉・山茶碗	第8次調査			
		古墳時代 古代	ピット 土坑	須恵器片 土師器片	第9次調査			

名古屋文化財調査報告38
埋蔵文化財調査報告書29
正木町遺跡(第7次～第9次)

1998年3月20日発行

編集 名古屋見晴台考古資料館
発行 名古屋教育委員会
名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
印刷 株式会社 名古屋大気堂

